

五稜

19 1 62

函館市立大川中学校
田家分教場 生徒会

五



稜

MOKUZI

Part 1

創刊のことば 創刊に際して…………… 2~ 3

Part 2

この一年の思い出—写真と文集—…………… 4~10

Part 3

生徒会のあゆみ・組織・役員名簿・前期生徒会をふりかえって
後期生徒会の動き・専門部のあゆみ・クラス紹介・クラブ便り
作品展受賞者名簿……………11~33

Part 4

私達の研究……………34~38

Part 5

詩・短歌・俳句・作文……………1.10・38~50

写真で見るこの一年の思い出



入学式



函館空港遠足

地鎮祭



新校舎ができるまで





ソフトボール大会

.....写真で見る

この一年の思い出.....



中央校舎へ移転



一つになった職員室

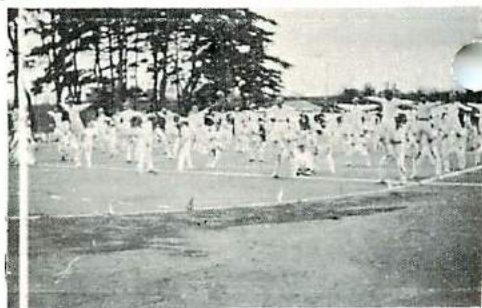


夏休み作品展示会

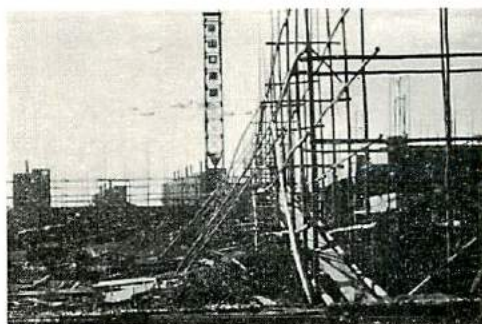
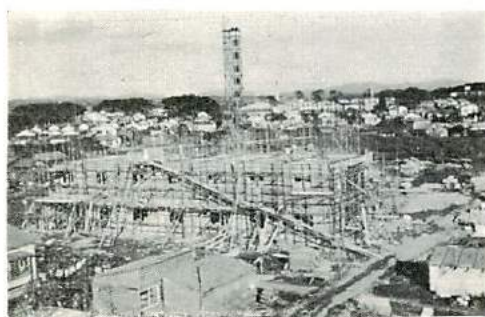
.....新校舎ができるまで.....



運
動
会



仁山高原遠足





生徒会役員選挙

.....写真で見る

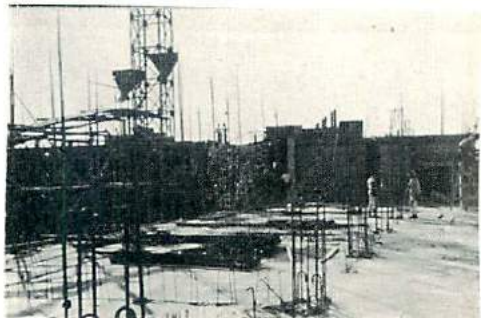
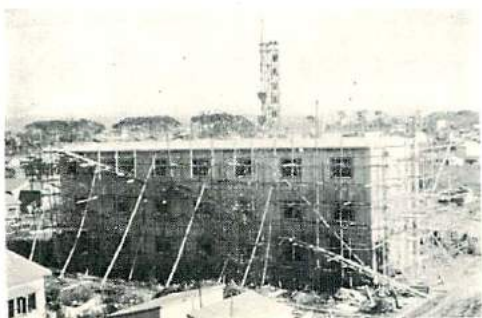
この一年の思い出.....

授業風景



新校舎写生会

.....新校舎ができるまで.....



新校舍落成



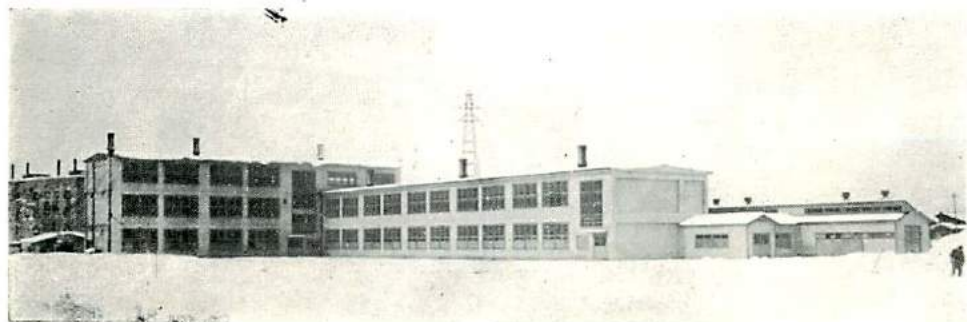
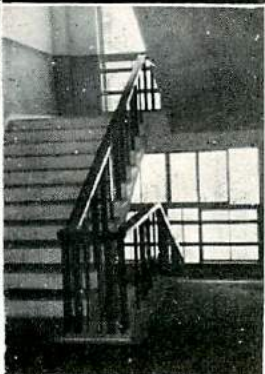
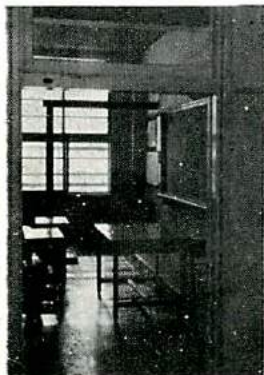
清 掃



運 搬



移 転



写真で見る

この一年の思い出

移 転 式



↑ 創設職員



函館山スキー遠足

冬休み作品展示会



..... 卷 頭 詩
.....

ア
ル
バ
ム

〇 組 岸 田 ヒ ロ 子

アルバムを開くと

遠い昔の思い出がある

赤ちゃんだった頃……

母がくわしく教える

五つ六つの頃……

学校にあがるときの写真……

病気をしたとき……

運動会や遠足のとき……

……楽しい思い出

……悲しい思い出

写真を見ながら思い出を語り合う

アルバムはたくさん写真をのせて

思い出をのせて

何年ものころだろう

創刊のこゝろ

後期生徒会会長

又坂常人

今度、僕たちの学校の生徒会の組織や活動、また僕たちが、どの様な気持で、新校風を作るために努力しているか、などを掲載した、大川中学校田家分教場の生徒会誌「五稜」が、発行されることになりました。この事は、これによって、田家分教場の存在が幾らかでも、社会の人々に知られる事になるとも考え、生徒一同が、皆楽しみにしていた事でした。

今迄は、田家分教場といつても「へえ、そんな学校あったのかい」などと言われることもあり、ましてや、そこにどんな生徒が、どんな気持で、またどんな様子で勉強しているか、などという事は、あまり知られてない様なことも多かつたと思います。然しこのような事がこの生徒会誌の発行によって、田家分教場とは、どういう学校で、そこに入っている生徒はどんな気持で、新校風を作るために努力しているか、などということが、理解して下さることと思います。僕たちは、この学校の校風を作る重大な責任をおっています。僕もその一人です。僕が、この学校の校風を作るため目標としていたことは、

第一に、折り目正しい校風

第二に、礼儀正しい校風

第三に、生徒会の活動の活発な校風

などです。僕は、自分なりに努力してきたと思います。このような僕の気持が、この生徒会誌の中に、充分織りこまれてあると、思います。そして、読まれる方に、この気持をいくらかでも、読みとってもらいたいと思います。

これからの田家分教場へは、四月になれば、新しい一年生が入り、僕たちも二年生になります。今年は、全体的に見て、生徒会の活動は不活発でした。もっと活発にやれば良かったと反省しております。

それ故、来年の抱負としては、生徒会の活動をもっと活発にし、学校内の行事は全部生徒会の手でやる、というような立派な生徒会を作り上げて行きたいと思う。これが来年の抱負です。「五稜」も第一号は、第一回というせいもあるのでしょうが、僕たちの気持が充分に、表わされていない面も、他から見ればあると思います。だが、この生徒会誌も、僕たちの学校と同じ様に、回をおうごとに、段々に僕たちの気持が良く表われ、学校生活の指針になるような、立派な生徒会誌に育てて行きたいと思えます。

創刊に際して

分校主任 沼山吉之助

諸君は昭和三十六年四月本校の第一回生として入学した。田家分教場として発足、三十六年十二月待望の新校舎に移転するまでの、九ヶ月間は、大川、中央の両校に分れての、分校生活、よく学習にも、生活にも、耐え忍び、多くの困難を克服、一筋に頑張った。先輩のない諸君は今後続く後輩のため、本校の校風樹立とか、よき伝統とかを随分聞かされたことであろう。これが第一回に入学した諸君の運命である。

発足当時は恵まれぬ教育環境でもあったので、特に日常生活を、明るく、楽しくあるように工夫すると共に、将来一人一人が落伍者とならぬよう、実力を身につけさせることが何より大切であると考えた。殊にこれからの世の中は力のある人が認められるであろう。

本校としては、中学校一年生から、時間を尊重し、日常の生活は計画的に、積重ねの学習を奨励、ねばり強い実行によって学力を養うことに全力を注ぎながら人間としての豊かな力を養うことをねらって来た。

三十六年十二月二十一日は、新校舎移転の記念の日で、生涯忘れることのできぬ感激の日であった。鉄筋のすばらしい新校舎に移転したのだから、これを契機として教育の場を如何に生かして行くかが諸君の双肩にかかっている。

今更言うまでもなく、校舎建築がすばらしいとか、校舎が新しく立派であるとかで、その学校がよい学校とはならない。校舎外観に見合う生徒諸君の内容の充実によって決められることを自覚され、今後続く後輩のためにも末永く誇り得る本校の教育目標の

○ 自主 勉 励

○ 友 愛 協 調

の精神を発揮して

○ みんなによるこぼれる学校

○ みんなが幸になれる学校

の実現に協力一致頑張りました。その際、仏作って魂入れずにならぬようにと、激励の言葉がありました。本校創立の諸君としてこのお言葉に答えるため今後一層の努力を希望する。

尚この一ヶ年間のお父さん、お母さん方、学校教育のために数々の御理解ある援助協力をいただいたことに対して深く敬意を表します。この生徒会誌もPTAのおかげであることを考え感謝を申し上げます。

この一年の主な行事 (学校日誌より)

- 4・6 入学式
- 4・14~ 健康診断
- 5・15
- 4・18 学力テスト
- 5・18 クラブ活動編成
- 5・19 函館空港遠足
- 5・25 前期生徒会役員任命
- 5・30 知能テスト
- 6・1 中間テスト・X線間接撮影
- 6・6 学級対抗ソフトボール大会
(五稜郭公園)
- 6・17 新校舎地鎮祭
- 6・27 校内映写会(北白川子ども風土記)
- 6・30 月例テスト
- 7・3 中央中学校より学校放送を受ける
- 7・5 腸バラ予防注射
- 7・8 映画『かあちゃんしぐのいやだ』見学
- 7・12 定期テスト
- 7・19 内科検診
- 7・21 大川校舎より中央校舎へ教具運搬
- 7・22 移転・両校舎生徒対面式
- 7・24 第一学期終業式
- 8・19 第二学期始業式
- 8・23 板垣綾子先生実習に来る
- 8・24 月例テスト
- 8・25 クラブ活動再編成
- 8・28 夏休み作品展

- 9・2 板垣先生離別式
- 9・11 健康優良児小田晴久全道大会へ
- 9・25 第一回大運動会(五稜郭公園)
- 10・3 月例テスト
- 10・11 映画『ローマオリンピック』見学
- 10・12 仁山高原遠足
- 10・19 中間テスト
- 10・20 後期生徒会役員立候補者立合演説会
- 10・21 後期生徒会役員選挙
- 10・30 森町大火見舞
- 10・31 新校舎写生会
- 11・16 診断的学力テスト(国・数)
- 12・5 定期テスト
- 12・16 新校舎へ教具備品の運搬始まる
- 12・18 新校舎清掃
- 12・20 新校舎落成記念展示会
- 12・21 移転式
- 12・23 第二学期終業式
- 1・19 第三学期始業式
- 1・22 冬休み作品展
- 1・30 月例テスト
- 2・9 函館山スキー遠足
- 2・16 映画『裸の島』見学

！文集！ 行事の思い出

入 学 式

一年E組 稲垣 悟

小学校を卒業してからは二週たったきょうは、晴れの入学式だ。組の皆と別れたのは一寸淋しかったが、きょうはともううれしい。午前九時ごろ家を木村君高崎君野口君と一緒に出た。この四人は小学校から同じ組だった。大川中学校へ行く途中「四人、組が同じになるといいな」と話しあったり、「お前の服だぶ／＼だな」とか色々な話しをしているうちに大川中学校の校門について、門を入ってから四人で組の名前がのつてあるのを見ていたら、大川中学校の生徒の名前が書いてあるのに気づき四人で、またちがう門へ急いで行った。あまり広いので間違えてしまったのだ。でもこの大川中学校の校舎は非常に古かった。四人で門に入って探してみたら、一番始めに野口君が見つかった。野口君はD組であった。高崎君はG組、木村君はF組、僕はE組で担任の先生は西谷先生と書いてあった。四人は、がっかりしながら、それぞれ別々の教室に入った。でも皆は、ともうれしそうだった。それは、前同じ組の人や近所の人が出たからだ。ほとくの組はたった三人だった。住田君と佐々木君と津里さん。けれども佐々木君はまだ移って来たばかりなので、何もうれい感じはしなかった。それに男で知っていたのは、たった一人であったからだ。でも僕の家のすぐ後にある柳町君といっしょになれたのでほっとした。教室を出て四人で廊下で話しをしたり、遊んでいるうちにベルが鳴ったので一斉に教室へ入った。西谷先生はメガネをかけ

て、背の高い中年の先生だ。先生は教壇の上上がって「ぼくがこの組の受持西谷です。」といった。僕の気持ちは落着かなかつた。おそろくほかの人たちも僕の気持ちと同じじゃないかと思つた。しばらくたってから廊下に並らんで入学式にはいった。すると運動場には三つの教室がもうけられてあった。その三つの教室は、僕たちの学校のA、B、C、の生徒が勉強する教室であった。まもなく入学式が始まり一番最初に大川中学校の校長先生が話しをした。すこしズズズウ弁で、「みなさんご入学おめでとう。」と言うとみんなクスクスと笑つた。それから各先生の紹介があつた。ぼくたちの学校の分教場主任は沼山先生であつた。色々な先生の紹介があつたが、はつきりとは聞えなかつた。僕たちの先生は社会の先生だった。入学式が終わって教室へ入った頃、急に大雨が降ってきた。雷が鳴り、ものすごい雨だった。西谷先生は、「今先生の人数が足りないのので私が数学を教えます。」と父兄の人に言つていた。それから先生は僕たちに胸章をくれて男には、黒板に学生服のえりの部分を書いてつけるところを教え、また女の子には、服の絵を書き胸のところに着けるのだと教えてくれた。その後僕たちを帰えし、父兄の人たちと何か話しをしていた。数分たつてから母が教室から出て来た。そして木村君と一緒に門を出た。雨は、さつきよりひどくはないがまだ降つていた。門を出てから僕は、中学の勉強はどのくらいむずかしいのかな、と考える小学校と同じ気分ではだめだなと思つた。そしてもう一つ感じたことは門を出た時なんだかいっぺんに中学生になつて偉くなつたように思われた。また中学生としての新しい勉強を一生懸命しようと思ひながらバスにのつて帰つた。

函館空港遠足

一年G組 久保隆志

きようは、いよいよ遠足だ。空は曇って少こし冷えていたが、石田さんの家の前に行くくと白旗が立っていた。「よかった」長谷川君も来ていた。きつと心配していたのだから。母がおにぎりを作ってくれて、したくができた。時計を見ると八時十五分、もう行く時間てくつをはいていると、調子の良いオートバイの音が近づいてきた。あれは本田のドリームの音だな、と、考えていると、家の前でオートバイの音がとまった。だれだろうと思つて外に出ると、阿部先生だった。「おはようございます。」と、言つたら先生は「おはよう。」とほくに言つて、「オートバイをあずかってくれませんか。」と母にたのんだ。母が「どうぞどうぞ」と言つと、先生は「それでは」と言つて、オートバイからカギを抜きとつた。そして、先生が歩き始めたので先生の後に着いて公園裏に行つた。公園裏には、いるいる、田家中学校の生徒がすぐく来ている。まるで蜂のようだ。ほくはその人ごみの中に入つて、友だちに自分の持つてきた大きなショルダーバックを見せて、「ほくのショルダーバックは大きいだろう。」と言つと、友だちは「なぜそんな大きいショルダーバックを持つてきた。何が入つている。」と聞いた。集合だ、みんなよそいきの顔をして沼山先生の話を聞いていた。

さあ出発だ。A組から順番に歩き始めた。いなか道はでこぼこしているので足が痛い。みんな話をしながら行く。ほくもとなりの友だちに「あの山は富士山に似ているな」と、言いながら歩い

ていると急にくさいにおいがしてきた。みんな「くさい」と言つた。ほくは「いなか特有の香水だな。」と言つとみんな笑つた。

ラサール高校の横を通つて、湯倉神社に入つてひと休みした。巨大な飛行機が真上を通り過ぎて行つた。そのときは早く飛行場へ行きたい気持ちでいっぱいだった。それからまた歩いた。根崎の競技場を通つてから、飛行場へ行く道は石が多くて歩きにくかつた。しばらく行つて横道へ入ると、広大な飛行場が見えた。

「広いな。」とみんな口々言つていた。コントローラタワーも見えた。

また公園裏のように一カ所に集まって先生の行くところに別れた。みんな何か言いながら食事をした。そして野球をしたり、バドミントンやドッチボールをしたりして遊んでいるうちに、「帰りたくをして帰るのかな。」と思つて集まると、二階建のビルの屋上へ上がつて、支配人さんの話を聞いた。支配人さんの話によると「この飛行場は、北日本空輸と言う会社で経営しています。」と言つたとき、北から西に回つて飛行機が飛んできた。ほくはショルダーバックから小さいカメラをとり出して必死になつて写した。飛行機はしだいに下がつてきて滑走路に着いて、ほくたちの真正面にきた。プロペラの音がしだいに小さくなつていく。胴体の出口が開いて中から二十人くらい乗客が出てきた。「この飛行機はダグラスDC3と言う型の飛行機です。」と支配人さんが言つた。ビルを出て、根崎の競技場まで歩いて、そこで解散した。家に帰つて晩飯のときに、楽しかつた遠足のことを父や母に話した。

ソフトボール大会

一年F組 小 田 晴 久

中学に入って体育の時間にソフトボールをおもにやった。ソフトボールといってもみんなさげ半分までやっている。「勉強になるのかなあ。」と思った。しばらくして、試験が近くなつた時、用事で職員室へ行くとソフトボール大会のことが黒板に書かれてあつた。ぼくは、すぐ体育の阿部先生に聞くと「運動会の代わりにソフト大会をする。」とおっしゃつた。もともと野球好きなぼくは、体育でソフトをおもにやったことがわかつた。でもその大会の前に試験があつた。勉強もしなければならぬ。しかし他のクラスでは練習をしている。ぼくたちも負けられない。といったぐあいでは勉強よりも野球の方が多かつたと思う。

大会の日、五稜郭公園に朝早く集まり練習した。みんなの顔に闘志がよみとられた。打つ。投げる。走る。みんな真剣にやっている。何とかして第一戦には勝ちたいという気持がよく表われていた。そのうちだんだん他のクラスの人たちが集まつてきた。ぼくたちは練習をやめて、ベスト・メンバーを決めた。先生がたが見えられ、ライン引きなどを手伝い、いよいよ組合わせのくじびきとなつた。人のうわさではB組が強いとか、C組が強いとかいろいろ言っている。浜地君が引きにいった。するとE組と当つてしまつた。これに負けると第一戦でおしまいというのでみんなはりきつて守備についた。作戦をねり、守備をかため、打棒をふるい、ひとりひとりの力を出しきつて試合を進めていった。最終回を切りぬけた。勝つた。先生は「よくやった」とおっしゃつた。

男出徒は女生徒の試合を見に行つたら負けている。必死の反撃もおよばなかつた。ついに敗れた。でもよくよせず「男生徒の試合に応援に行つてやる。」と応援にきてくれた。第二試合の始まる時、女の人は男の人に二つの石をすり合わせてカチカチと耳のそばでやり、勝つようにといった。ぼくたちは集まつて、第一戦のときと同じケースで、もつていけるとよいなあと思つた。第二戦、ギラギラ照りつける太陽の下でぼくたちは、必死にふんとうを続け、第二戦も勝つた。残るは決勝戦。大勢の人たちが見守るうちに決勝戦が行なわれた。はりきつて守備につき、ふとあたりを見回わすと一塁側と三塁側は顔、顔、顔。多くの人の顔が目に入った。急に固くなつてしまつた。はじめ「エラーすると笑われる。三振すると笑われる。」ということが気になつて思うようにプレーができない、固くなつていたのはぼくだけじゃなかつた。みんなそうだつたのだ。みんながのびのびとしたプレーが出来なかつたので最初は負けていた。でもまわりの人たちに応援してもらつたので、みんなまた闘志をもやした。ぼくのつけた名だが「水爆打線」が爆発した。とたんに逆転して、一塁側のF組の応援している人たちを喜ばした。もう太陽も大部かたむき、冷たい風がふきはじめたころ、審判の手はF組の頭上に高々と上つた。ぼくたちは手を取りあつて喜んだ。賞状をもらいみんなからもたたえられた。みんなとてもうれしそうだつた。

中央校舎へ移転

一年〇組 藪 下 明

きょうは、いよいよほくたち田家分教場が大川校舎から中央校舎へ移転する日だ。学校へ行くとき、ほくたちの使っていた教室には大川中学校の人がもう入って、ほくたちは直接屋内体育館の方へ行った。もうみんな来て、おにをやったり、ゴム飛びをしたりして遊んでいた。ほくたちの組の人が、みんなかたまって話をしていたのでほくも行った。なにかと思つたらやはり移転のことである。「家が遠くなる。」とか「雨ふりには困る。」とか、ガラスは三枚あとは板張などといろいろ批判が多い。「でもしかたがないさ。まだほんとうの校舎がないものそれに分教場だし。」と言っている人もいる。そのうちにベルが鳴りお別かれの会をした後、校長先生やほかの先生に送られて、ほくたち一行は元気に出発した。初めは順調に、あつちを曲りこつちを曲がりして行った。歩くにつれて一行は、列も乱れおそくなつてきた。それにとでも暑い日だ。新川の土手を下つて電車道をすぎたと思つている間にも中央の玄関前に来た。A組から入つたしゅん間、あちらからもバチバチ、こちらからもバチバチ拍手の音でいっぱいだ。ほくたちは玄関のとなりの教室に入った。ガラス三枚だった教室がみなガラス張りて明るい教室になつていた。朝会の時に聞いてびっくりした。これはみんな中央校舎の人がなおしてくれたのだ。それにガラスを九十七枚も入れたと聞いてまたびっくりした。早くほくたち田家中学校が建てばこんなことにならなかつたのになあ。なにかにつけて不便だからなあ。とほくはつくづく思った。

仁山高原遠足

一年F組 木 村 照

ガタンゴトン、ここは汽車の中だ。汽車の中はワイワイとうるさい。私と田賀さんは隣同志である。さつそくりニュツクを開いてガム類を出した。そのとたんに開りがうるさくなり何本かの手が出た。その手の正体は男生徒であつた。みんな口々に「ガムけれど。」とか「レッテルよこせ。」と言っている。田賀さんが「いやだ、何かととりかえないと、そんなもの。」と言つた。

私もそれに口ぞえして「日本だつて無条件降伏して、そんなしてらんだもの、私たちだつていやだよ。ねえ。」と二人で顔を見合させた。男の人たちは、あぎれたような顔をして何かぶつぶつ言つていた。私たちは平気ですましていた。やがて目的の駅に着いた。駅の前が集まつた。先生たちは、声からして注意をしていたが、私たちは一向にかまわずワイワイとしゃべりまくつていた。登りにかかった。またも私と田賀さんがいっしょである。二人で手をつなぎいろいろおしゃべりしながら登つた。気がついて見るとF組の一番前に来ていた。だから後の人たちを待っていた。歩きはじめた。また、先頭に出てしまった。それから、かまわずに、どんどん登つた。E組の中ごろまで来た。水島さんが「あんたたち歩くの速いね。」と言つていた。山の三分の一位の所から私たち二人は息切れがしてきた。その時はもうA組を越していた。A組は最初に落伍したらしい。三分の二位に登つたらわきの方からガサガサと音がして松井先生がニュツと出て来た。そして私たちが向かつて「お前たちより一歩速かつたぞ。」と言つた。私と

田賀さんは、顔を見合わせた。もう頂上の建物がすぐ頭の上に見えて来た。前の方に二人の高校生がいた。トランジスタラジオを大きな音でかけて、自分たちもなにかしゃべりたてていた。その人たちの横を通りすぎた。ラジオの音ですごくうるさい。私たちが高校生の前に出たとたん私たちをひやかした。私はこんな山にまで来てよくそんなことが言えたと思う。山にまで来て、都会の放送を持ち入らないでもらいたい。山に来たからには、山で楽しむのが常識ではないか。とそんなことを思いながらさっさと登った。道のわきに斜面がある。そこから登れば近道になる。田賀さんが「ここから登ろう。」と言ったが私は足が痛いので、斜面のゆるやかな方を選んだ。ふと上で笑い声がおきた。見ると山崎君たちである。いままでは、私たちが一番だとばかり思っていたのに、山崎君たちが先きでゆうゆうと休んでお茶を飲んでいっている。私はくやしかった。「くやしー。」と言ってさっさと道にそって登った。最後のカーブを曲った。見るとゆるやかな斜面が広がっている。上の方に山小屋が見える。私は痛い足をひきずり、田賀さんに励まされてようよう目的のところに着いた。場所を決めてリュックを置くとほっとした。その場にねころがると、とても気がよく空がとても美しかった。山小屋のあたりを見まわしても、私たちの組の人は見当らない。川に行き顔を洗った。そこらにだいぶ人がいて、口々に「キャー冷たい。」とか「気が持が悪い。」「どれ、どれ。」とさげんでいた。私がいまだ顔を洗っていた。ほてっていた顔がひんやりとしてすばらしく気が持がよかった。また水を飲んでみると手が切れるくらい冷たく、歯にすくしみた。二人とも洗ってしまうと、田中さんたちを迎えに行つた。途中で田中さんたちに会つた。私と田賀さんは小林さんの物などを

持って手伝つてやつた。話を聞いてみると、目的の場所が違つていて、私たちを待っていたそうだ。リュックの置いてある場所に置いて休んでいたら、集合の笛がなつてみな集つてきた。先生の注意を聞き、解散した。私たち六人はどこにすわろうかな、とあちこちぶらついていた。上を見ると阿部先生と松井先生と平沼先生が登つていたので、私たちも、追つて登つた。そして少し出つた所で休んだ。先生たちはそこで待っていた。

さつそくりリュックを開き食糧を出しかぶりついた。阿部先生は、ニヤニヤしながら私たちを見ていた。感じが悪いので、だれかが、キャラメルを一コやつた。そしたら先生は、大つきなりリュックに大きな口を開いてそれを入れた。だから私もその中にキャラメルを入れた。みんなおにぎりを食べ始めた。平沼先生は、先におりて行つた。阿部先生もおにぎりを出した。松井先生はリュックを下に置いてあるのでおにぎりを持っていない。阿部先生は松井先生におにぎりのおすそ分けした。すこく大きいおにぎりだ。私も先生たちもみんなもおにぎりをほおばつた。私のおにぎりが一コ、コロコロと下に落ちていった。食べる物を食べた私たちは遊びにとりかかった。私の持つて来たボールでバレーボールをした。私たちのいる所はだいぶ高い所なので、うかうかしてボールをはずされない。ワーワーキャーキャーさわいでるうちにとうとうボールをはずしてしまい、下まで取りに行つた。私は松井先生の下り方をまねして見たがなかなかできない。先生のかつこうは、見れば吹き出したくなるようなかつこうである。帽子はチロルハットをうんとちぢめたようなもの。ジャンパーに手をつつ入み、ブカブカした長ぐつで、ジグザグに歩いておりていくのである。何回もボールをはずし下までとりに行くのは大変な事だ。何回往復

したか知れやしない。ボールにあきたので今度はころがって歩いた。斜面を利用し、はらばいになり、ころがって下りるのだ。私は阿部先生にぶつかってしまった。先生は、「おおいって骨が折れた。」とぶつかった所をさすっていた。下を見ると、どんとんと、高校生らしき人物が入って来て、真中に陣取っている。私たちは、「ズウズウしいね後から来たのに。」と言っていた。有斗の生徒らしい。ほんとに「やな感じ」だった。

自由時間も終わり、また集合して下った。菅原先生は一生懸命に前に出るな出るな、と注意していたが私と田賀さんは、どんだん歩いていった。行く時は全く気がつかなかった美しい風景に気を取られた。函館もはつきりと見えた。仁山駅の前で一時集合し、しばらく私のボールで遊んでいたが、おもしろくなくなり、男の人たちのバレーボールに入れてもらいに行ったら、けんかごしになり、入れてもらえなかった。女の人は、ブリブリとおこっていた。もちろん私もだ。

「津村が池に落ちたぞ」とG組の黒川君たちが言った。私は別に気にもとめず、バレーボールの交渉に行き入れてもらった。男女とも、どちらも、まけん気でやっていた。そろそろ汽車の来る時間である。みなホームに出た。田賀さんがめずらしい木を見つけて持ってきた。まるで仙人の持っているような形だ。みなぶじに汽車に乗った。

広 い 空

一年F組 中村 香津子

広い空……

青空にまっ白な雲がうかんでいる

あの広い青い空で

ゆうゆうとしてうかんでいる雲

「あの地面で人間どもが広い土地をもとめて

うようよしているよ、ばかだなあ」

雲がそういつているようだ

そう雲にいわれてもしかたがない

私たちの生活は

あの晴れた美しい空とはちがうのだから

私は行きたい……

あの心がかかるような空へ

なにもかもわすれてとんで行きたい

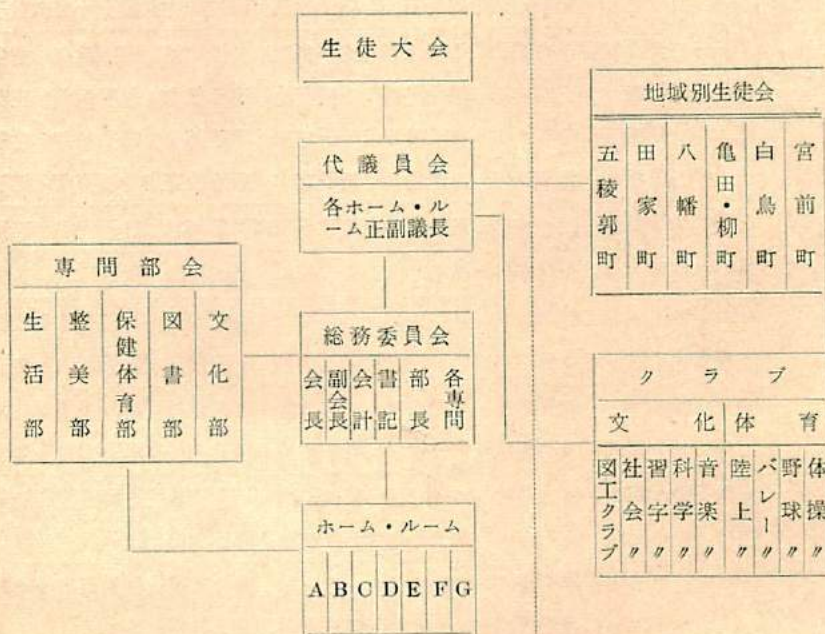
そして私の心の中も

広い空のようになりたい

生徒会一年の歩み

- 5・4 生徒会組織決定
- 5・6 ホーム・ルーム代議員、専門部員決定
- 5・11 生徒会代議員会（生徒会役員選出）
- 5・18 生徒会看護班編成（生活部員）
- 5・22 専門部会（専門部委員長選）
- 5・25 前期役員任命式
- 6・17 地域別生徒会編成（町別）
- 7・18 全市中学校生徒生活指導協議会
（会長副会長書記出席）
- 7・21 地域別生徒会（夏休みについて）
- 7・22 両校舎合併対面式
- 9・25 運動会
- 10・14 後期生徒会役員立候補受付
- 10・19 立会演説会
- 10・21 投票、開票、当選者発表
- 10・23 後期役員任命式
- 10・24 新旧役員引継
- 12・16 全市中学生生徒生活協議会（会長生活委員長出席）
- 12・18 新校舎移転に関する各部会
移転
- 12・22 校外生徒会（冬休みについて）

生徒会組織表





会 長 渡 利 三 郎 (A)
 副会長 東 達 美 (G)
 村 岡 千 鶴 子 (B)
 木 村 照 (F)
 書 記 森 孝 男 (B)
 辻 由 起 子 (E)
 会 計 小 田 晴 久 (F)
 新 井 田 惠 子 (C)

前期生徒会役員

	A	B	C	D	E	F	G
議 長	須藤 慶一	畑 沢 正	高 沢 孝 義	藤 田 真 司	又 坂 常 人	杉 村 誠 一 郎	河 井 明 吉
副 議 長	石 川 京 子	乙 川 綱 子	田 辺 千 代 美	石 川 律 子	水 島 満 枝	田 中 久 美 子	小 野 久 美 子
生 活 部	駒 崎 三 郎	若 狭 谷 茂 夫	網 代 德 雄	上 杉 秀 一	稲 垣 悟	山 崎 恒 男	池 田 雪 生
	今 野 元 司	徳 正 則	宮 田 恒 夫	外 崎 明	菊 池 達 行	松 本 信 義	遠 藤 正 明
	坂 本 文 子	渡 辺 春 美	小 山 京 子	及 川 由 美 子	石 田 洋 子	外 山 晴 美	笠 井 啓 子
	倉 寿 子	浜 田 邦 子	塚 田 ぶ さ	中 川 紀 子	富 山 恵 子	牧 野 恵 美 子	斎 藤 節 子
文 化 部	馬 場 和 子	荒 谷 光 子	三 上 正 義	芹 田 恵 美 子	小 川 真 理 子	西 村 静 子	梶 谷 照 治
図 書 部	能 登 真 理	石 川 光 世	野 呂 耕 子	今 泉 裕 子	平 山 恭 一	佐 藤 順 一	南 川 達 夫
整 美 部	川 井 博 光	工 藤 将 幸	高 木 厚 三	大 川 昇	中 昭 成	本 間 正 志	尾 崎 美 代 子
	斎 藤 真 佐 子	三 浦 恵 美 子	小 笠 原 美 幸	四 ツ 柳 陽 子	上 杉 一 子	田 賀 佳 子	青 山 啓 子
保 健 体 育 部	金 村 照 康	熊 谷 一 英	蔽 下 明	石 沢 進	武 野 道 夫	諸 井 敏 郎	黒 川 力
	三 浦 公 子	阿 部 淑 子	鍛 原 三 枝	中 村 光 子	中 野 和 子	中 村 香 津 子	中 村 清 江
ホ ー ム ・ ル 計	寺 内 慶 人	福 田 耕 二	鳥 村 登	花 岡 英 俊	白 淵 茂	浜 地 正 治	谷 岡 真 知 子
	田 堰 光 子	佐 藤 英 子	古 坂 京 子	小 島 ひと み	渡 辺 静 子	大 竹 美 子	
ホ ー ム ・ ル 記	近 藤 潔	島 田 道 子	藤 井 雅 恵	佐 藤 孝	上 村 純 吉	後 藤 喜 久	市 川 佳 成
	村 上 曜 子	奥 田 志 満 子	古 西 悦 子	表 良 一	丸 山 栄 子	島 崎 ユ タ エ	

後期生徒会役員

会長	又坂常人 (E)
副会長	小田晴久 (F)
	石川律子 (D)
書記	森孝男 (B)
	辻由起子 (E)
会計	花岡英俊 (D)
	新井田恵子 (C)



	A 組	B 組	C 組	D 組	E 組	F 組	G 組
正副議長	須藤 慶一 石川 京子	麓 正則 村岡ちづ子	宮田 恒夫 田辺千代美	藤田 真司 芹田恵美子	菊池 達行 水島 満枝	杉村誠一郎 木村 照	黒川 力 青山 啓子
生活部	駒崎 三郎 渡利 三郎 倉 寿子 馬場 和子	国分 育雄 畑沢 正 乙川 絹子 佐藤 英子	網代 徳雄 島村 登 岸田ヒロ子 鈴木真由子	上杉 秀一 棚池 正治 及川由美子 中川 紀子	稲垣 悟 白淵 茂 池田千鶴子 上杉 一子	川服 良平 後藤 喜久 大竹 美子 外山 晴美	池田 雪生 河井 明吉 小野久美子 谷岡真知子
文化部	斉藤真佐子	石川 光世	蔽下 明	表 良一	小川真理子	山崎 恒男	笠井 啓子
図書部	今野 元司	奥田志摩子	野呂 耕子	岩田千恵子	平山 恭一	笹浪 登	細川 康平
保健体育部	宮田 繁夫 阪本 文子	工藤 将幸 島田 道子	三上 正義 小笠原美幸	石沢 進 中村 光子	上村 純吉 中野 和子	松本 信義 田中久美子	南川 達夫 中村 清江
整美部	金村 照康 熊谷 信子	掛村 一憲 阿部 淑子	高木 厚三 鍛原 三枝	佐藤 孝 四ツ柳陽子	武野 道夫 石田 洋子	諸井 敏郎 田賀 佳子	東 達美 阿部 良子
H・R会計	清水 猛美 田塚 光子	熊谷 一英 荒谷 光	高沢 孝義 小山 京子	外崎 明 小島ひとみ	住田 茂 渡辺 静子	木村 隆治 中村香津子	梶谷 照治 尾崎美代子
H・R書記	川井 博光 野々宮京子	若狭谷茂雄 三浦恵美子	藤井 雅憲 塚田 ふさ	近藤 通正 今泉 裕子	中 昭成 富山 恵子	藤沢 建二 西村 静子	市川 佳成 助石 元

前期生徒会を振り返って

前期生徒会会長

渡 利 三 郎

前期生徒会をふりかえってみると、だいぶ先生方に頼り過ぎていたのではないかと思います。全部が一年生によって組織されていることは、やり易いようにもみると言え、はじめての運営のことなのでとても充分とは言えません。

その原因のもっとも大きいものは、大川校舎と中央校舎の二つに分れたことだと思います。会を開くにしても開きようがなく、発足当時は特に、生徒会があってもなくても変りがないように感じとられ、「勉強するにしても、仲間造りをするにしても、大きな穴があくのではないか」という心配がありました。しかし総務委員会や各部会などを開くたびごとに大川校舎から中央校舎の方へバスに乗って雨の日出かけたり、夜遅くなる日などが続き、本当につらい思いをたび重ねている中に、入学当時はなにも役に立っていなかったような生徒会だったけれども、だんだんと地盤が固ってくるような気持がしてきました。特に春も過ぎ夏に入ると生活部をはじめ、各部の活動や地域生徒会、クラブ活動の運営上、特になくはない存在になって来たように思いました。しかし、そうしている中、あと夏休みが二、三週間に迫ったある日、担任の先生から「中央中学校に移る」ということを聞かされたのでした。大川校舎三学級の大部分の人たちは校舎までの道のりがだいぶ遠く三十分または二十分と長時間かかり、はじめのうちは実にいやでたまりませんでした。しかし今から考えてみれば実

に学校のため、ぼくたち生徒会のため、良かったと思います。そして田家中学全部の生徒、先生が一つの場所に集って終業式を送ることができました。しかしいちばん待ちこがれている新校舎建築の方は地鎮祭を終えたばかりで一向にできるけいはありません。もっともその頃のぼくたちの心配は、本校のできることでよりも、早く四学級の友だちと仲良くなることでした。しかしこのことは心配するまでもなく、幸いによく仲良くなり、安心して勉強やクラブの仕事などが出来るようになりました。また、最も良いことには、「生徒会の集まりなどで顔を見合せ言いくいような固い気持ちのことも多かつたのが、どんどん意見を言えるようになったことでした。その頃の生徒会の代議員や生活部会などの仕事ぶりは前よりもずっと目について活発になって来ました。また、夏が過ぎ秋に入ると、待ちに待った運動会、仁山遠足など本当に楽しかったですが、この陰には先生方や父兄の方々の並々ならぬ御活躍があったことは忘れられません。

十一月に入って後期の生徒会が発足しました。前期と比べ物にならない良い生徒会ですが、前期の生徒会の責任が終った訳ではないと思ひ、私たち前期委員も協力し、これからの生徒会を盛り立てて立派な校風、良い伝統を築き上げ先生によりかかっている生徒会ではなく、名実共に独立した自主的な生徒会にしなければならぬと思ひます。

後期生徒会の動き

後期生徒会書記

森 孝 男

僕たち、田家中学校、生徒会后期役員の出選は十月に行なわれ、立候補者の演説、応援弁士の活発な発表をしましてから公明な投票により、議事の運営や案を討議していく会長をはじめ、会長を助けて会長と共に議事を討議している副会長二名、それから議事が決まった事を記録していく書記二名の役員と、また、級に於ける各議員、各専門部委員をきめました。

生徒会の機構は、先ず中心になるのは会長、副会長、書記の三役の五名が主となり、会議を進めて行く一さいの中心になることとなります。次に専門部の部長と三役が集って会を開くのを総務委員会といいます。また各学級の議長や、副議長などが代表となつて学級からの持ちより議題をきめる会を代議員会といいます。代議員会は校内の最高の決議機関であります。また各部の部会としては先ず校内の生活目標や生活態度を見守るのが生活部の仕事であり、清掃の面や校内の美化などを見守るのは整美部であります。また、まだ図書館の設備は出来てないけれど、本のあつかい方やら本棚の整理などをしているのは図書部、清潔の習慣を身につけ、きちんとした服装など健康な状態を調べるのは保健体育部であり、習字や図画、工作などを展示したり、学校新聞を作ったり、いずれは放送したりするのが文化部などの仕事で以上の五つの部に分かれて熱心な活動しております。

また専門部会で疑問な点があったり、やつてもらいたい事がある

場合、直ぐそれを総務委員会で案をとり上げ、代議員会に持って行ってその原案を討議します。これが今まで僕たち役員がやってきた生徒会のあらましの組織です。所で今その組織を振り返って見ると会の開き方については臨時会議やら、特別の会合などが多くそのため中々役員委員のみんなへの知らせ方が徹底せず、分らないで帰っていく人がいたこともあり、会合が開きにくいことがありました。

また運営の方法としてぼくたち生徒会役員は、議事や会議の話し合いばかりに力を入れ過ぎて計画だおれになってしまふこともあり、実際の活動の面に手抜かりのあったことも反省されます。今まで他の学校を借りて勉強し、しかも同じ学校の一年生が二つに分かれて勉強したことによるいろいろな苦労がありました。十二月末ようやく学校ができて本当の田家中学校で一緒に勉強できることができました。然し、まだ学校には校舎こそ新品で鉄筋コンクリートですけれども、体育館もなければグラウンドもない、図書館もなければ体育器具もない。教材もろくにそろっていないいなにもない学校なのです。然し、これを住み良く、楽しく勉強できるようにするために生徒会がより責任と努力をもって困難を克服したいと思えます。田家中学校の生徒会役員が互いに協力し合い、助け合いながらがんばり、そして設備の備わった金持な学校より楽しい学校をつくることを何時も頭に入れながら今までの苦しい経験を充分に生かして、より良い学校をつくらせて行きたいと思えます。

専門部便り

生活部

A 組 駒崎三郎
C 組 網代徳雄

ほくたちが、生活委員に任命されたときの気持は、これからどうしてやっていったらよいか、不安な気持で一杯であったが、そのときは看護当番のことについて話しあった。そして看護のやり方について話し、そのあと腕章を看護の生徒にわたしたが、その腕章がビニールのさいふのようであったので、しばらくの間は看護の生徒はひやかされた。それから夏休みになるまでは中央校舎と大川校舎に分かれ部会を開き話し合った。そのつどいろいろな問題が提出されて二つの校舎に分かれていた。そのつどいろいろな問題が提出されて二つの校舎が合併したので生活部会の議題も順序よく決定するようになった。生活部を受け持つ先生は永谷先生と千葉先生で、いつも生活部会には必ずどちらかの先生が出席する。と、いうようにして四か月間中央校舎での生活が続けられた。その間に起ったことを簡単にまとめてみよう。まず第一に遊び場がないので、廊下で遊ぶことが多い。そのつど気を使うのが生活部委員、いや看護である。第二に遅刻をする人が非常に多いことである。毎朝三十分のカネが鳴ってから四十五分になるまで、各組の看護の生徒合計七人が玄関に出て、組別の遅刻人数を調べる。終わってから教室へ帰ると授業が始まっていること

がちよいちよいある。しかし遅刻をするのも無理ないと思った。なぜかというと学校が遠いのでやはり仕方ないと思う。でも、新校舎に移るとグット減ると考えていた。特に月曜日のときは、とても困った。やがて待ちに待った十二月十八日がやってきた。この日は新校舎に移転する日であった。さいわいこの日は朝から天気が良かった。新校舎に移ってからの生活態度は、中央校舎よりも、はるかにきりつ正しくなったようであるが、まだまだ直さないうといけない点がたくさんあります。それから、今までやってきたことの中で、看護の生徒としての願いはたくさんあるけれども、その中で一番たのしみたいことは、もう少し看護と云うものの理解をしてもらいたい。それから、もう一つ看護の生徒の云うことはぜつ対に聞いてもらいたい。その他に大事なことを拾ってあげてみると、便所の使い方をもう少し工夫して欲しい。便所の中ではぜつたいに遊ばないでほしい。通し教室の遊びについては、昼休み以外には遊ばないのですから承知してもらいたい。そしてマツトなどを持ち出して遊んだり、女子の使用の時に、男子が使ったりしない様にしてください。新校舎に来て家が近くになったせいか、放課後用もないのにおそくまで残っている人がふえてきたので、そんなことのないようにして下さい。クラブの残っている時間は、四時半です。そのほか目立つことでは、学校にいらぬ物を持って来ている人がよく見受けられる。主にビストルやナイフなどであるがその他にも余計な物を入っている持っている。それから今まで階段がなかったためかおもしろ半分の手すりをすべる人がいる。看護当番は一週交代たいで四班に分かれている。そして一つの班には七名ずついる(名組一名ずつ)。朝は八時十五分、帰りは当番終了後全員集まる。

以上一年間の生活部をふりかえつてみて、足りないところもあつたが、皆一生けん命やったと思う。今後も一そうしつかりやりたい。

文化部

こんどは立派な新聞を

後期文化部副部長

小川 真理子

文化部は昨年の五月頃から活動を始めました。それから九カ月、その間にはいろいろな仕事がありました。文化部の仕事は、ひとくちには言えませんが、大きくわけると、放送のこと、映画のこと、新聞や雑誌のこと、文化祭のこと、弁論大会やレコード・コンサートのこと、などにわかれます。

その中で、前期の文化部がとりくんだ仕事は、生徒新聞発行について、スライド会について、校内映写会について、夏休み作品展示会について、運動会の放送係についてなどでした。この外にいろいろな中学校の放送施設の見学も考えてはいましたが、実施できないでしまいました。生徒会新聞については、原案を総務委員会に出したがなかなかきまらず、前期にはできませんでした。スライド会というのは、映写機がなくて映画ができませんので、市のフィルム・ライブラリーから、物語りやいろいろな勉強に参考になるスライドを借りて来て、みんなに見せてあげようという計画でしたが、これも実行できずにしまいました。来年は映写機を買っていただいて、映画もどんどんやっついていきたいと思ひます。

後期に入つて一番の文化部の仕事は、中央中学校へお礼の放送

を送ることでした。私たちの学校生活や、先生方の紹介などを録音テープにしたのですが、完成するまで毎日放課後残つて、ますましい技術と頭をみんなでしぼりあいました。ある時には、みんなとけんかして「もうこんな文化秀員などやめてしまおう。」と、思つたこともありましたが、でも、よくよく考えると「あとに残つた仕事をだれがやるのかしら。このくらいのことではけんかして弱気を出してやめてしまつては、今までの苦労が水のあわになる。少しくらい腹が立つてもがまんしよう。」と、自分の心に決めた。そして、いろいろな資料が集まり、本格的な仕事に入りました。一日一日と仕事が進み、だんだん仕上がりに近づくにつれて、どうゆうものが私たちの力でできるのか楽しみでした。「これを聞いて、中央中学校の人が私たちをわらわなければいいけれど。」と思ひました。そしていよいよ私たちのつくつた作品が放送される日がきました。その日、一日、なんだかおちつかない気持ちでした。私は、なんだかうれいような、はずかしいような気持ちでいっぱいでした。放送が終つて友だちに「初めてにしてはとてもじようずだったよ。」とはめられました。その時、私は「あの時くじけないで最後までやつてよかつた。」と、心から思ひました。

新校舎に移つてから、待望の生徒会新聞発行も決定になりました。このことを聞いた私たち文化委員の七人はとびあがつて喜び、次の日からさっそく仕事に入りました。なんだかひとり心がはずみ「どこの学校にもまけない立派な新聞を作ろう。」と決心しました。

これから、私たちは、もつともつと光つた靴のように、みんなを力にあわせて、よい文化部にしようと思ひます。

整 美 部

前期整美部部長

中 昭 成

ぼくは整美部の部長になって、この中央中学校の古い校舎をどうして清掃していったらよいのか見当がつかなかった。そのうえぼくたちの学校は上級生がいないので、ぼくたちが整美部の基礎になるのだと思って、まずいろいろ代議員会や総務委員会に疑問をたずねました。どうしてこの校舎を使っていたらいいのか、まったく見当がつかなかった。そこで整美部会でこの校舎をぼくたちの手で中央中学校に不服のないよう、毎日当番が終つてから見て歩くことにしました。その仕事は一週間に二回、それは容易なことではありませんでした。ときどき委員の人が仕事があるといつて帰ることもありました。そんなときはもう一人のかわりの人とかぼくなどが一人でみんなが帰つたあとと見て歩きました。雨の日などは屋根からもつてきて、ゆかがビシヨビシヨになることもありました。また風の強い日などはすきまからビュウビュウ入つてきたりしたときなどは教室の中に新聞紙などを張つてふせぎました。そしてぼくたちは先生に相談して、用具の足りないものとか、こわれたものなどどうにかしてそろえてもらえないものかと頼んで、どうしても必手なものなどを用意してもらいました。ぼくはそのころから新校舎に希望を持っていました。そして十二月の中ごろもう新校舎もすつかりでき上つたころ、ぼくたちはこの古校舎にそして中央の先生がたに、いろいろお礼のことをばかかし、われわれの学校は独立校となつたのです。いまの新校舎は

驚くほどのきれいさです。このきれいさをいつまでももちたいと整美部ではいつも校舎内の清掃の仕方に尽しています。しかしこの清掃はみんなが、全校生徒が力を合わせなければいけないのではないのでしょうか。

またこれからも、まだまだむこうの学校にいたときよりもつと心配がふえたような気がします。よごしてはいけないと思うからです。ぼくはことし入ってくる一年生一同に、このままのきれいさをいつもわすれないで整美委員の苦勞を助けて下さいとたのみます。

保 健 体 育 部

前期保健体育部部長

黒 川 力

保健体育委員会が出来たのは、中央校舎と大川校舎に別れている時で、いろいろと不便を感じる時期であった。最初の仕事は、春季の遠足とクラブ発足計画である。委員会の結論を出すようにといわれ会合を持ったものの、中学校のことは、何一つわからぬ者共ばかり、いや全く大弱りだった。しかし、各クラス二名の計十四名も集まると、どうにかなるもんだ。遠足は、とても楽しかった。大川校舎の分校生との初顔合せにもなった。

ふりかえつてみると、ぼくたちの活躍にもいろいろある。その一つは、運動会だ。委員は六時から手伝に出た。ラインのひきなおし、広い会場で、まき尺をもって走りまわった。つぎに、会場の清掃だ。砂が多いのではくのにとても苦勞し、運動会がはじまらないのに顔も汗とホコリで黒くなった。でも、これだから、本番だ。ぼくたちの仕事の中で競技中の仕事が一番苦勞した。自分た

ちも競技に出場して、なおかつ、仕事も同時にやらなければならぬのだ。仕事ばかりしていて、自分の出番をわすれてしまうこともあった。口の中もかわいてからから、つばも、でないくらいだ。やっと、一息つくのは、昼御飯の時。みんな、にこにこしてお父さん、お母さんのところへかえっていった。昼御飯がおわって、また仕事をした。

競技はつづけられる。ぼくたちは、人がすくないので、一クラスを二つにわけて出場させる。それなりに仕事も多い。自分の出番をわすれて、別の組にまじっていることもある。その時は、ぼくたちがいつて、きちんとしてあげる。競技中おもしろいこともある。ピストルをならすこと。これは小学校の時からやってみたいなあ、と思つていたので、とてもゆかいだった。その他、競技の時使用するものをならべたり、走者がころばないために、砂をとりのけたり、いろいろあった。みんなつかれているようだ。やっと運動会がおわった。でも、まだあとかたづけがある。みんなブーブーいいながら、あとかたづけをした。運動会も本場に愉快に終った。現在はスキー遠足の計画が始まっている。一年を通して、委員会は活躍している。保健活動に体育活動に一年生七つのクラスでこのくらいだから、来年が思いやられる。

今年度の体育大会成績

ソフトボール大会

男子優勝	F組	女子優勝	B組
二位	D組	二位	G組
三位	B組	三位	C A組

運動会学級対抗競技成績

男子優勝	B組	女子優勝	C組
二位	A組	二位	B組
三位	組	三位	F組

図 書 部

後期図書部部長

平 山 恭 一

私たちの学校は、つい最近一期工事が終わったばかりなので図書館はまだありません。新教舎ができるまでの第一学期は、大川中学校と中央中学校を借りておりましたので、図書館も両校の温かい思いやりのおはからいで、両校の生徒と同様に利用させていただきました。そのために図書委員としての活躍もありませんでした。ただ各学級ごとに学級文庫を作って、図書委員を中心にして動いてきました。書物はなかなかうまくいっていましたが、新校舎に移ってから、新しい本も集まらず、利用する人も少なく、本もくたびれてしまったようです。

学校に図書館がないということは本当にさびしいものです。今さら四月から十二月までの長い間利用させていただいた大川、中央両校の先生や生徒のみなさんの思いやりをありがたく思います。本校でも何とか一日も早く図書館が出来て思う存分利用したいものです。そうならば自然図書委員としても活躍出来るようになるだろうと思います。それまでは今まで通り各学級で、学級文庫を工夫して少しでも皆さんの役に立てていきたいと思っています。

クラス紹介

仲良く協力的

A 組 石川京子

私たち四十三人は四月に大川中学校第一教室でA組と名づけられて誕生し、生みの親である千葉先生とともに満一歳をむかえようとしています。そこで今までの生活をふりかえり、どんなクラスであるか紹介したいと思います。「私たちのクラスはどこに行っても負けない立派なクラスだ。」これは誰もが思っていることです。私たちもそんなことをいただき今日までを、のんびり生活してきました。みんな仲がよいのでこんな生活を送れたのです。ここで私たちのクラスの仲のよい面について少しお話ししましょう。

私たちはみんな努力家で、こまかったことがあると先生を中心にして活発に活動します。こんなことは二、三回ありましたが、たいていは成功しています。また、生徒会の選挙の時もいろいろ苦心しました。そのほか私たちの自まんのできることは、クラスの中にグループを作って、自分の付き合う人は誰と誰、とあの人はあまり付き合わないなどというものは、全くありません。千葉先生は私たちのクラスは男子と女子とが仲がよいとよくおっしゃいます。中央中学校にいたころです。一時間目が終わり二時間目は図工の粘土細工、窓からは風が吹き込みストロブのない教室はとても寒く、粘土などつかまれそうもありません。私は用事があり職員室に行くと、千葉先生が「二時間目の授業はなんだい。」と聞かれました。「粘土細工」です。という、「粘土細工か、困

ったなあ、あの教室寒いからな。」とそう言っているところに、菅原先生がおいでになりました。千葉先生は「それなら隣り同志で机をつけたらいくらか暖かくなるんでないか。」とおっしゃいました。すると菅原先生が「やあ、それだけは、やめてくれないかな、こっちの方が暑くなるよ。」と手を横に振りました。どうしてかと言うと、私たちのクラスは男と女がサンドイッチに並んでいるからです。あまり話しが多いから二学期からこうなっちゃったのです。千葉先生は本気でこう思ったらしく真剣な顔でした。そのほか私たちのクラスの良い所は委員の注意を良く聞いてくれる事と協力的のある事です。委員の注意は中に二、三人へりくつを言っていて聞いちゃいけない人もいますが、そんな時は口で言わず目でにらむと、にやりとして聞いてくれます。協力的について私が一番うれしかった事は教室に目張りをした時の事です。日ごろあまり積極的でないと思つてた人が進んで手伝っているのを見て、本当に心の中が晴々するよううれしく思いました。こうやって書いていると悪い所なしのクラスです。確に全体的にはそう言えます。一人一人では明かるい性格の人が多いので自然、教室の中も明かるくなります。

私たちのクラスのB君を紹介しましょう。せいは低い方でどことなくはがらかな感じを与えます。ある体育の時間女子の方が少し男子より早く終わったので教室で話をしていました。するとガラガラといきなり戸のあく音がしみんな一斉にその方を見ました。一番乗りのつもりで教室にかけ込んで来たB君は女の人だけいるのにびびりして、あわてて飛び出て行きました。そしてはかの男生徒五六人と一緒に胸をはり、まじめな顔をして、教室に入ってきました。それを見た女生徒はふき出してしまいました。ちよっ

とおつちよこちよいのようですがすごくまじめです。A組にはこんなタイプの人が多いのです。二年生になると組をかえると聞いています。私たちが切角良いクラスを持たのにバラバラになるのが本当に残念な事と思います。

スポーツが得意・団結力がある

B 組 石川 光 世

「先生来たぞ」という声で、みんな一せいに席について先生の来たころには、みんなしいんとなつて、今のさわがうそのように思われる光景が、毎日毎時間くり返されているクラスが私たちのクラスBです。

スポーツが得意で団結力のあるクラスで、運動会の時には、男子が一位、女子が二位、男女総合で一位をとり、またソフトボール大会の時は女子一位、男子三位というりっぱな成績をとりました。ところが、いざ勉強となると、みんなさつぱりだめで、全校のベスト・テンに入ったことは、わずか数回しかありません。そんなクラスなので、先生はいつも「スポーツは良いけれど勉強になるとさつぱりだ、それでも得意なものが一つあるからいいさ。」と、にが笑いをしています。また私たちのクラスは、にぎやかで、楽しいほがらかな組ですが、男女共にみんな、活発でできない組です。このころは、トランプがはやっていますが、二期期の終りころは、寒かったので、女子も男子顔負けの、のり馬をやつて、テンプルローダーにとられて、後からみんな聞いて「これが、女子か。」と、びつくりするくらいだったので、みんなで大笑いしたことがあります。男子もきかないけれど、女子もそれに負

けないくらいに、おてんばなので、男子も、女子におつかげられたりするそんなクラスなので、習字や図画のように落着いてやる仕事はあまり熱心ではありません。それで、成績の方もあまりよくありません。けれど良い面として、前にも述べたように、団結力があるので、遊ぶときには仲間はずれがなく、議長さんまたは副議長さんが中心になって、みんな遊びます。またけんかなどをしても、すぐに仲なおりして、いっしょに遊びます。私たちみんなが楽しみに待っている時間は、体育とH・Rの時間ぐらいで、体育の時間に「外で運動しないで教室で勉強をする」と、先生に言われるとみんなぶつぶつ言いながら勉強をしたりします。H・Rの時間にはすぐに、男子の意見と女子の意見が対立してしまいます。またH・Rの時間に議題のないときにはリクリエーションをやつて、みんなで童謡から歌謡曲まで、どんな歌でもいいから歌い合います。はじめのうちはみんなはずかしがっていましたが、二、三回やっているうちにみんななれてしまつて、みんなはずかしがらずに歌っています。

クラブ活動関係の方面では、スポーツ関係に入っている人はだいたいクラスの中には、全体の三分の二くらいの人たちが入っています。また担任の松井先生が、野球部の先生かもしれません。男子の二分の一くらいの人には野球クラブに入っています。今度二年生になると組がえをするという話ですが、私たちB組の人は、「二年生になつてもこのままで変わらなければいいなあ」と口々に言っています。いつまでもB組の人たちはB組の人たちで、中学生生活を終れるようにお願いして、この作文を終らせていただきます。と思います。

活発で運動がとくい

C 組 小山・塚田・小笠原・田辺

一年C組、我クラスは永谷先生の受け持ちで、男生徒は二十三名で、女生徒は十七名で、合わせて四十名です。毎日のくらしは、朝、男子が早くくると、ストープのまわりをとってしまい。女子は一人もあたりに行けなくなりません。たぶん、男子ばかりの所にあたりに来るのは、きまりがわるいのだろう。女子はみんな、同じ所にかたまつて、話をしています。男子が、だいたい分集つると、ストープからはなれ、廊下にいき、すもうをとったりして遊び、すると、それをまっていたかのように、女子がいつせいにストープのまわりに集まり、ベチャクチャおしゃべりをしはじめます。あとから来た男子は、あたりたくてもあたれない。きつと、きまりがわるいんでしょう。授業の始まりのカネが鳴っても、先生がまだこない、何人かの人が廊下へ出て、先生が来るかどうか、ようすを見ている。先生が来ると、「先生が来た」と、言い、皆いつせいに席につき、静かになります。授業が始まった始めのうちには、皆な静かだが、だんだんと、あきてきてさわがしくなつてきます。これが、C組で毎朝くりかえされる日課です。クラスの大部分の人は、活発で運動がとくいです。一学期におこなわれた。ソフトボール大会でも、男女共に、三位をとり、運動会は、女子が一位、男子は、ふだんの活発さが見られず、六位に終わってしまいました。C組の人たちは自分のあやまちを認め、皆すなおで、明るい生徒が多いのですが、授業時間の前後に少々さわぎすぎるのと、男子と女子の間が時々うまくいかない事が、欠点です。この問題もクラスで話し合つて、なおしていきたいと思います。

明朗で、男女仲がよい

D 組 芹田 恵美子

私たちの組のたいていの人は、明朗な性格で、とても良い人ばかりです。勉強時間も、とても愉快に過ごします。とくに体育の時などは、先生が大変おもしろいので、みんなが愉快に一緒になつて笑つて勉強します。こういう学習時間の態度は、現代の学校生活には必要なものだと思つている。やはり、ある程度は先生方と笑ひながら親しみをもち、楽しく学習するのがいいだろう。休み時間になると、男の人は将来のことをいまから考えているのか、社長のまねをしたりしていぼつたり、テレビの影響などもあつて、ピストルの早うちだとか、中学生と思えないような幼稚なところもあります。女の人は、歌をうたつたり、ベチャクチャとおしゃべりをしたり、男の人をちよつとからかつて満足して遊んでいる。休み時間は、やはり自由な時間だけあつて、机に向つて勉強している人より、このように遊んでいる人の方が多い。

D組の一年を振り返つてみて、印象にのこる思い出といえば、運動会やソフト・ボール大会のことがある。運動会では、私たちの組は男女とも総合点数で一番最後だった。ちよつと愉快なような、また、なんだかいやな思い出である。それでも運動会のような競技は、みんな楽しく参加するというのが一番大事なことなんだと思う。オリンピックの精神でいこう。たまにはD組も一番最後でもいいだろう。ソフト・ボール大会では二位だった。その時の感激は今でもわすれることができない。とくにすぐれた選手もいなかったが、回が進むにつれてチーム・ワークがよくなり、C組を破つて、強敵F組に一点差で、最後までくいついていった

フアイトはすこかった。作戦も上手だった。一位はとれなかったが、この準優勝は本當にうれしく、その喜びをみんなで語りあった。

私たちの組のホーム・ルーム活動はいつも活発である。いろいろな計画をたて、各部の委員はいそがしく働いている。私たちは毎朝、学校へくると廊下で自習をします。学習委員が黒板に書いた問題をいっしょうけんめいやって、少しでも自分たちの成績をあげようと、みんなが努力している。また、私たちの組は、女の人と男の人と気軽に話すことができるので、大変よいと思つてゐる。それは、やはりあの一学期の時にやったトランプ大会の原因があると思う。一学期の初めころは、それぞれ名前も顔も全然わからず、なかなか友だちにはなれなかった。それで、早くみんなが仲良くなれるようにとトランプ大会をやることにしたのだ。男の人も女の人もいりまじつてグループをつくり、休み時間だけでは足りず、ホーム・ルームの時間も使つてとても楽しくやった。その効果があつて、私たち男女は大変仲が良いのだと思ふ。

兄弟のようになかよく助けあう

E 組 水 島 満 枝

私たち四十五人は団結して毎日楽しい生活を送っています。このE組がどのような生活をし、またどんな人々が集まっているか簡単に紹介したいと思います。

朝、いつものとうりみんながここに顔で、つきからつきえと教室に入つてきます。その度毎に実に威勢の良い挨拶がとびだし

ます。その日の出発はその一声ではじまります。そしてベルが鳴ると我クラスの自慢の一つとなつて自習がはじまり、黒板に書かれてある問題を着々と料理してみんなは先生のいらっしやるのを待つています。いつもこう順序よくいくといひのですが、その日によつて二、三人がふざけたりしてやらないときがありますが、それでも実にみんなはしつかりやります。こうしてその日の授業が始まります……。

授業中にみんなを笑わせるのはA君です。この人は他人のことでもかまわず大きな声でしゃべつてみんなをびっくりさせたり、おどけたり、クラスではいちばん面白い人です。そのほかにも気のやさしい人や、わりと短気な人や活発な人などさまざまで、友だち同志は兄弟のように仲が良く、困つたことがあれば、みんなて助け合ふといつたような状態でなかなか協力心も強いです。そしてまた、男女の仲がとても良いといふことはクラスを一段と明るくしています。でも、あまり仲が良すぎてときどき小さなことでもみ合い失敗してしまいます。そのほかにもクラスの良いことや、おもしろいことと長所はたくさんありますが、その反面には短所もちゃんと持っています。

そこで私たちのクラスのいちばん悪い点を紹介します。それは「おしゃべり」です。どこのクラスにも少しはおしゃべりがあると思ひますが、私たちのクラスのように、にぎやかな組はないと思ひます。授業中でもなんとなく教室の中がさわがしく、はじめのうちはなかなか勉強の気分がでてこないありさまで、でも食事中は静かな方で、ときによつて静かな日ときたら実に静かで、話し声一つしませんが、先生は「いつもこんなに静かにしているといいんだがなー」と言つてみんなを見まわします。私たちのH・

Rの時間はとてもゆかいで、ときどき意見が対立し、東西ベルリンのように別れてしまい、かえって活発的なH・Rになるので議長や書記は意見をまとめるのに一苦労します。また、困った意見が出て私たちの力ではまとめられなくなると先生の知恵をはいしやくします。H・Rが終わったあとにも先生は私たちのH・Rを批評して下さいます。

西谷先生は生徒に対して理解のあるやさしい先生です。ときどき授業中に気合をいれてみんなをおどろかせます。私たちの短所を少しでも早く直すため、みんなで力を合わせてよりよいクラスにしていきたいと思えます。

騒がしいが学力優秀

F 組 木 村 照

私たちの学級は一年F組、担任の先生は、平沼先生である。私たちの学級は一口に言って、とても騒がしい。それでいて半面平均して学力がすぐれている。と言われている。良いのか、悪いのかはつきり言えないような学級である。私たち一同は陽気すぎて始業のベルが鳴っても先生がいらっしゃるまで騒いでいることがあるので困まる。さあ月曜日の一時間目が始まった、国語だ。平沼先生がいらっしゃって授業を始められた。本を目読させ、黒板に漢字を書いて「ふりがなを書け。」とおっしゃった。続いて反対語を書かせ、先生は腕組をして、それぞれなまけているらしい人を見回って歩いておられる、さすが担任の先生の時だけに静かである。休み時間、女生徒は本を読んだり、ストーブの回りで話しかったりしている。男生徒も本を読んだり、ゲームをしている。

次の二、三時間目は職業で、たいいの人は、この授業を好んでいるらしい。とくに製図を書くとなると、皆な器用にやっている。そのためか、職業で製図を書く時は質問や見学に立って歩く（特別にゆるされてる）以外は静かである。さて、四時間目は待望の体育の時間である。みんなは喜び勇んで上着を脱ぎすてて、ソウリ袋を持ち、飛び出して行く。体育委員を中心として準備体操をして、マラソンを終われば、ドッチボールをする。体操は、女生徒の方が手早く男生徒は時々先生に注意を受けることがある。体育の時間はだれにでも短かく感ずるものである。授業が終わって教室に入ると、日直の男生徒はふくれっ面をしながら、遅いとか、おもしろそうだった。などと言いついていた。四時間目が終わるとお弁当である。パン係や牛乳係はいそがしくなる。そして私たちの学級には、パン販売係と牛乳販売係とがいる。これは他の学級には無い係りだ。皆が食事している時に、この係りの女生徒が、教室に入って来るので一時的にうるさくなる。この点で男生徒から苦情が出た事もあった。食事中は、私たちの学級はとても静である。カタツとも音がしないくらい、無気味なくらいである。食事も終わり、休み時間も終わって、五時間目の授業である。例によって例のごとく、西谷先生がいらっしゃるまで陽気になりすぎている。先生がいらっしゃる。きょうは、テーブレコーダーを用いて授業を受けるのだ。スイスの国の放送である。普段騒がしい人も放送を聞く時は、だまって聞いている。社会の時間も過ぎ次は数学の時間だ。初めのうちは良いのだが、だんだん時が進むにつれて騒がしくなりベルの鳴る時間を、今か今かと待つ人が出て来る。だから終わりのベルが鳴ると、喜び勇んで変な声を上げる人も出て来る。私は自分の学級でありながらがっかり

する事もある。ところで私たちの学級の一日をお知らせしたが、大体のようすは、わかったことと思う。私たちの学級は、またすっかり団結はしていない。しかし、あとわずかな間だからしつかり団結し合つて立派な学級を作り上げたいと思う。他の学級のみなさんも立派な団結し合つた学級を作つて下さい。そして学級同志が団結し合い立派な正しく、明るい校風を作らう。

少しうるさいがわりかし優しい

G 組 東 達 美

ぼくたちのクラスG組は、とてもおもしろいクラスである。G組の担任は阿部先生、それに四十四人の生徒がこのG組を作つてゐる。ある時阿部先生が、一人の転校生をつれていらしたが、ぼくたちのことを先生は、「こいつらは少しうるさいが心が、わりかしやさしいやつらだからな」とぼくたちを紹介していらしたが、このことばこそ、G組の性格をとてもよく、あらわしているうるさいやつらというのは、授業時間にむだ話が多いことであるが女生徒の方がうるさいやつらの意味が強まる。しかし、男生徒も、女生徒にまけないくらいうるさいこともたまたまある。とくに女の先生の時間と数学の時間がうるさく、先生の注意をうけることも毎時間のようである。こんなうるさいクラスでも、担任の阿部先生の時間と、べん当の時間は、かりてきたねこのように静かである。なぜ急に静かになるか？。それは、阿部先生にげんこつをもらつたり説教をくつたりするのを敬遠して静かなのだ。それは、朝と最後のホームルームと阿部先生の体育の時間だけである。先生は、べんとうの時に、ぼくたちといっしょにべん当を

食べることはない。それなのに静かである。先生の話によるとよその組ではだいたいうるさいらしく、生徒の食事指導のため先生が生徒といっしょにべんとうをたべるらしい。べんとうの時間が静かなことは、このクラスの自まんでできることの一つである。先生のクラス紹介の言葉にやさしいやつらとあつたがそのあらわれとして、病人がでたり、家に不幸があつた人があると、ともにいたり、心配し合つたりして助け合うのである。しかし助け合うというのは特別な場合だけで、ふだんは、あまりクラス全体の協調性というところはない。とくに、ホームルームの時間などは、意見を述べる人もごく一部のに限られ、あとの人は、決を取るとき手を上げるくらいのもので、あとは、となりの人とおしゃべりをしたり、ほかのことをしたりしてゐるのである。クラスの男生徒と女生徒の仲がよいかわるいかということは、よく話題になるが、このクラスはあまり仲がよくない。おしゃべりをする時だけ男女が仲がいいのだからと先生がおっしゃつたが、まったくそのとおりで、ある。よくいろいろな先生から、この組の女生徒はうるさいとか、きかないとか、気がきかないといわれるが、そのことばのように女生徒の方が強い。男生徒がストープにあたつてゐると、女生徒がストラムをくんで、ストープをせんにやうするのである。勉強の特別熱心な人は、数人いるが、うるさいので能率があまりあがらないことが多いのでこの点は深く反省しなければならぬ。勉強の成績は不安定で、全校の首位あらそいに、できるような人はないが、中ぐらいの成績の人が多く、全体の成績はよくなつたりわるくなつたりしている。こんなふうな、欠点も多いがよい所もあるG組はほんとうにおもしろいクラスである。あと数日でのこのクラスははなればなれになり、まったくちがつたクラスを作りあげていくだろう。それまでに、G組の四十四人の生徒がともに協力してよいクラスになるといいなあと思つた。

書道部

落着いて練習したい

部長 石川律子

美術部

油絵がかきたい

部長 東達美

クラブ便り

私たちの書道部は全部女生徒で、だいたい十二、三人の部員で活躍しています。いままでの学校は間借り生活のようなものであったので、これという目立った活動もできませんでした。でも新校舎移転を記念して行なった移転式のときの展示会に数々の作品を出品しました。これがクラブ員としてはじめての出品でした。それに冬季休暇のあとに開いた展示会には、廊下中に全校生徒のすばらしい腕前が、すみのかおりをただよわせました。その中でもクラブ員の作品は特別光っていました。これからは新入生も入ることです。学校内の展示会だけでなく、校外の展示会などにも出せるようにしたいと思っています。それにはまず練習がいちばんだと思います。いままでは落ち着いて練習もできなかつたありさまでした。これからは毎週何曜日に行なうかなどいろいろ決めて、練習にはげんでいきたいと思っています。

それからいまは女生徒だけで活躍しているので、新学期からは男生徒でも、書道の好きな人は入って活動したらいいと思っています。また、新入生が入ると書道部員もきっとふえることですから、いままでの活動を、よりいっそううつくばな活動にしていけるように考えていきたいと思っています。

美術クラブの部員は、僕一人である。初めは、一人しかないため解散するかという話もしたが、やっぱりやることになった。それにしても、志望者が一人しかないということは、全く不思議なことである。今まで美術部がやってきたことは、コンテを使って絵をかくことなどである。コンテとは、四角いしんだけの絵をかくえんぴつだとおぼえておけばいいだろう。それを使って、クロッキーやスケッチをするのである。指導してくださる菅原先生は、僕が家でミンクを飼っている話を聞かれて、それはおもしろい題材だとすすめてくださったので、なんかいもミンクの飼育風景をかいた。最近はまだ、学校の運動場の整地をしている人たちの様子が、僕の練習題材になっている。それでも、今までやってきたことをふりかえてみると、あまり活動がさかんではなかつたのではないかと思わさる。しかし、それも、美術部員としての僕自身があまり熱心でなかつたためだ。これからは、今まで美術部がやってきたことのほか、いろいろな材料を使って、いろいろなことをやってみたいと思う。例えば竹細工だ。先生といっしょに函館山まで竹を取りに行こうという計画もある。また、コンテも三色あるうち一色しか使ったことはない。その色は赤茶色で、それで絵をかくとなかなか深みのある絵ができるが、黒やこげ茶色を使ったら、またちがった感じの絵ができると思う。僕が一番やってみたいのは油絵である。色を厚くぬってかく油絵は、長い

間の根気を必要とするらしいが、僕は根気がないので、もしやつたとしても完成させられるかどうか、全く不安である。それから、今までびよう写を主体としてやってきたが、平面構などもやってみたい。また、ねん土細工は僕がもっとも好きな材料であって、あのかたまりを、けずったり、きずつけて作るうちに、しだいに形ができるのは、なんともいられない楽しさがある。

社 会 部

努力と協力をモットーに

部 長 菊 地 達 行

社会クラブは二学期から新しく出来たクラブで、クラブ員は二十七名、顧問の先生は西谷先生です。ほくたちの学校は昨年開校したばかりで、まだ設備も整っておりませんので十分なクラブ活動が出来ませんでした。最初クラブを作ったとき何をしようか全く見当がつかないで困りましたが先生の御指導によってようやくわかってきました。でも夏休みから校舎の移転式の展示会にかけての社会クラブの活動は今後のクラブに明かるい希望をもたらした、この展示会から私たちクラブ員は、努力と協力を尊ぶ学びました。私たちはこの精神を忘れることなく、今後ますます前進するクラブのモットーとしてゆきたいと考えております。また四月から新しい生徒が入学してきますので今までの人員不足も解決されるでしょう。これからの私たちの研究は学習に役立つ研究をし田家中学校が歴史を閉じるまで役立つものにしたいと考えます。また先生方には私たちの研究資料がより多くととのへて下さるようお願いしたいと思います。クラブ員としてはお互いの協力により、良いクラブの分間気を作り、先生にもあまりお手数をか

けないですむ自主的な活動ができるように努力を続けて行きたいと考えます。

科 学 部

もっと成果をあげたい

部 長 杉 村 一 郎

科学は、現在私たちの生活に全く欠くことのできない重要なものなのです。また人間の文化を発展せしめ、向上させている原動力といえましょう。それゆえ私たちの科学クラブは、科学に興味を持つ人たちが二十名からなっていますが、皆このクラブに入ったことに強い誇りをもって熱心に研究にいそしんでおります。クラブは大きく分けると、電気工学と生物学のグループに分れ、電気工学にはラジオ製作、いろいろな機械器具などの研究、模型の製作などを行ない、生物学は植物の研究、標本の製作、昆虫の研究などをいたしております。いまのわが校は、昨年誕生したばかりの学校なので一年生しかおらず、クラブも新らしく、設備も何もなく、部員も少ないのですが、四月からは新三年生と新一年生が来るとも聞き、若しそうなると、新一、三年生の協力を得て、先生の良きご指導のもとに部員一同一致協力して、なお一層努力し大いに成果を挙げることができると思っています。さていままでのクラブの歩みを振り返って見ますと、夏休み中の研究をまとめた作品展示会には、植物や昆虫の標本などを出品し、新校舎移転の展示会には、協同で作ったラジオや、植物、昆虫の標本を随分苦心して出品をいたしました。また生徒会の予算で、二石式ワイヤ・レス・マイクを作ったり、模型創作の合同研究、動植物の合同分類研究などを行いました。しかし、これからの文化祭や展示会には、

ほくたちの手で作った標本や模型、機械類をまだまだたくさん出品して、校内展示場をにぎわせるばかりではなく、いろいろな機会をとらえて校外へも出品したいと思えます。また将来わが校につく、校内放送器具のちよつとした故障などもほくたちの手でおそうという声もあります。またいろいろな山などへも行き昆虫、植物の採集をしてすぐれた標本を作り、立派な学習の研究資料を学校に残したいと思えます。またそれらの達成のための希望としてできるだけ、予算の特にある理科の学習に理解を持って戴き、専門教室や実験、研究の道具などを早くそろえてもらいたいものだと思います。そうしてクラブ活動も、研究や実験の費用に困まらないで、もっと自由にのびのびと研究できるようになりたいたいのだと考えます。最後に、良い校風とともに他のクラブより、より優れた自主的なクラブ活動を行なっていきたいと思えます。

音楽部

合奏隊を作りたい

部長 倉 寿 子

私たちの学校は、今度出来たばかりだ。クラブも誕生間もないので、まだ活発な活動はやっていないようだ。練習は、週に二回月曜日(は歌)、木曜日(は笛)と決まっている。練習は、約一時間、音階練習や、パート練習をする。音が、思う様に出ない時、手が、冷たい時、早く家へ帰りたいと思った時などあったが、みんながまんし、いっしょうけんめい練習した。そのかいあって私たちが始めて(は)で、完成した曲「旅愁」は、わすれられない曲である。この間音楽クラブ、始めてレコードコンサートをやった。これは、

クラブの提案で、クラブの中で、やってみたいと思う人たちだけ集まってやったものだ。放課後みんなと、レコードを聞いたり参考書を見たりして、どういうふうにか頭をひねった。レコードコンサートの日には、思ったより多くの人が集まってくれた。思ったより多くの人が、来てくれたので、私たちは、とてもうれしかった。これからも、よい音楽をたくさんの人に聞いてもらおう、この始めてのコンサートを参考に、これからも、たび／＼開いていきたい。私たちの学校には、一年だけで、二年、三年と土台を、しっかりと築き上げなければならない。私たちには、大きな責任があるのだ。それをはたすためには、もっと努力をしなければ、ならないだろう。私たちが、これから希望する事、それは、もっと練習してりっぱな合奏隊を作りたいと、思うこと。それからよその学校のように、クラブが、もつと／＼発展する事である。

手芸部

立派だった展示会

部長 斎藤真佐子

私たちの学校は昨年の十二月二十二日に、(移転式)をやったばかりの新しい学校ですが、新校舎ができる前には中央の古い校舎で、まどに目ばりをしたりして、寒さをふせいでいた学校でした。それなのでクラブ活動もあまりさかんでなく、手芸部は、新校舎へ移転するさいに記念して、(展覧会)をやるために発足したものです。各組から希望者を集め、桜井先生に指導してもらいました。

人数は約三十名、フランス刺繍、アップリケ、編み物と三つの

部門にわけ、みんなそれぞれすぎなところへはいり、うでをふる
いました。まずフランス刺繍では、先生に基本縫いをならい、そ
れを出品したり、またテーブルクロス、まくらかけ、ハンカチ
などにいろいろみごとな圖案をしたものがありました。アップリ
クでは、人数は少ないが、いろいろなはぎれで、おもしろいアイ
デアや手のこんだ作品がありました。

編み物では、とくに先生が提案し、リング編みのかわいい小犬
をつくったり、手ぶくろや、本ものにもおとらない帽子など、い
ろいろな作品が出品されていました。みんなは、放課後のこつて、
わからないところをおしえ合ったり、また時には口あらそいをや
ったりして、時間のたつのもわずれ、一生けんめいりっぱな作品
をつくらうと、努力しました。そのかいがあって、移転式の展覧
会はとてもりっぱなものでした。

体 操 部

めざましい進歩

部 長 田 中 久 美 子

私たちの体操部には、体操部専用の器具は何一つありません。
それは新しく出きた分校なので何かとお金がいるところから体操
部までは、まわってこないでしょう。だから今のところは正課
体育の用具を借用しているといった状態です。しかし、来年度か
らの大会を考えるとボヤボヤしてもおられない、といって男生徒
などは毎日放課後残って、ずいぶんと時間をかけてやっています。
時には女生徒も二、三人男生徒にまじってやっていますが、あま
りバツとしたものではありません。先生も用事のないときは、か

ならずコーチにきてくれますが、めったに先生の実技は見られま
せん。それは、先生自身も言っておられました。先生のお腹が
出て来て体の動きがにぶくなったからだと思われます。しかし先
生の数少ない模範演技を見ますと、マツト運動、飛び箱等では今
まで教えられた先生方には見られないすばらしいところがありま
す。特にスローモーションで分解しながらの説明には、笑いのう
ちに技を理解することができます。そして先生が口くせのように
言うことは、「何がさておいても練習だ、練習がすべてを制する
のだぞ。」と、またこうも言います。「危険がともなうから新し
い技をやりたいときには先生をよびに來い、新しい技は先生がヨ
シと言うまで補助者をつける、新しい技を習いたければ練習をサ
ボルな」と、先生は全くガツチリしている。そんな先生だから
生徒もみな明かるく楽しみながらやっています。たまにサボッて
いるところを見つかると、先生にどなられます。先生が大声でど
なったときは雷にも似ているのですが、すぐ冗談がとびだします
ので効果のない場合もあります。私は体操が好きですし、体もや
わらかいつもりで入部したのでしたが、男子のやっている空転、
バックテンなどを見えますと、何かしら背筋を走るものがあり
ます。しかし入部した以上駄目だと自分で考えるところまでやっ
てみたいと思います。幸に新年度は三年生も来るそうなので、前
の学校で体操部であったお兄さん、お姉さんが来ることを期待し
ています。三十七年こそ私たちの体操部が大きく飛躍する年です。

野 球 部

春の大会を目標に

部長 小 田 晴 久

初めてノックを受けてからもう一年、過去一年をふりかえってみました。大川中のグラウンドをかりて少し練習し、中央のグラウンドをかりて練習し、少ない人数で三十七年度の春の大会を目標に練習をつんできました。千代ヶ岳球場一周、円になっての体操、それから軽くピッチングというふうな練習でしたが、練習日には皆笑って参加しました。野球部の先生は元、大川中の野球部を育てあげた松井先生で僕たちもその先生のもとで一生涯懸命練習にはげまうと思っています。今までは中央のグラウンドが使われない時は草原で練習しましたが、他の学校にマータされるよう立派な野球部にしようと思っています。まだ完全にポジションも決っていないし、試合もしたこともない、ユニフォームもなければ、ほろいしもないといった去年の我々のクラブでしたが結成以来今年は二年目、希望だけは大きくもち、序々に道具をそろえていきたいと思っています。練習、それが一番部員には楽しく、またつらいものでもありますが、みんな練習をしている時は闘志にあふれています。新校舎に移ってきた現在、練習する場所はありませんが、しばらく我慢して、早くグラウンドで練習したいというのが、我々の希望であります。グラウンドがないということは、野球部はないといっても同じですが二年目の今年としては田家町、我中学校の良い環境のもと立派な野球部を作り後輩たちを迎えたいと一同努力を重ねています。それとともに、忍耐力、責任力を強めていきたいと思っています。近くに川は流れ、列となつてそびえる松、

広い空地、誰でも体を動かさないではいられない。不思議な土地で、空高くと上がるフライ、強烈なノックをがっしりとグローブにおさめたいと、選手一同はこれからも一丸となつて、障害をのりこえていくつもりです。

排 球 部

不利な条件をのりこえよう

部長 大 川 昇

バレー部が発足してから約一年たった。この一年を思い出してみると、いろいろな思い出がある。その中から二、三思い出してみよう。まず旧校舎の時は、練習場がなかったため、中央の生徒が帰る道で練習をしていたので思うようにできなかった。たとえば、雨の日や、風の強い日などは、練習は中止になる。それにほかたちには、先輩がないし、先生も少ないので、出てきてコーチしてくれることがあまりなかった。部員も少なくはないが、登録だけして練習があるとなると、用事があるなどといって、練習に出てくる生徒があまりなかった。よその学校では、りっぱな練習場で先輩などに教えられているのが、本校にはいないので、もっと自分たちで進んでやらなければならないと思う。それには部員の各人がもっと、自覚をしなければならぬと思う。部員がやる気をもてば、不利な条件ものりこえていくことができるのではないだろうか。

冬になって、練習も全然していないが、そろそろ室内でのトレーニングなどもやりたいと思っている。そうして後輩が入ってきて、よるこんで入れるような、りっぱなバレー部をつくりたいと思っている。

陸上競技部

今年こそ

部長 渡利 三郎

御承知のとおり、グラウンドその他の施設がゼロなので陸上競技部は実際のところクラブ活動らしい活動はしておりません。陸上競技部がつくられたのは三百数名の田家中学が大川校舎と中央校舎に別れていた頃で、グラウンドその他で私たちが自由になる物が何一つない時でした。男二十四名、女四名の部員数は勿論、すべてが他校と違つての発足でしたが全員張り切っています。中央校舎の窓下では来年度あたりから私たちが走るであろう陸上競技場の工事が完成をみようとしていましたし、大川校舎では段違いになつた数面のグラウンドで多数の競技部が夕方遅くまで熱のこもつた練習がくり返されてきました。九月末の中部連陸上競技大会の様子、九月に集中された中部連球技大会を見たり、体育の時間に先生から聞いたりしていると、今年度はどうにもならないが第一回の部会で二年生になつた時のために基礎体力をつけて各自で努力して行こうと話し合つたことが思い出されます。勉強部屋の窓下の雪がいつもの年よりとけ方が早いようで、日中の太陽の暖さは春がすぐそこに来ているように感じられます。今年こそ私たちの学校の名が全市にひびき渡ることでしょ。

卓球部

世界的な選手をめざして

部長 木村 照

私たちの卓球クラブは約六十八名からなりたつています。新校舎に移るまでは卓球台もなかつたし、先生や学校の都合で集会もなく、全員そろつて練習をするなどということもありませんでした。しかし新校舎に引越してからは卓球台も入り、放課後一日交替でA組から順々にクラス毎に練習をしています。クラブ員も、そうでない人もみんな楽しそうに練習にはげんでいます。ある組は、毎回男女代り番に練習をしているし、男女仲良く練習をしています。私たち卓球クラブでは、二年生も、三年生もいませんし、先生も一人しかいらつしゃいけません。ですから、指導して下さるのも数少ないので、ルールなどもまだ良く分つてない人もいます。でも大半の人は自己流でやつて、みんなは、けっこう楽しそうにやつて、じょうずな人はとてじょうずに行つております。井上先生のお話では、各組男女三名くらいずつ選出して、対級試合を行いたいそうです。ですからみなさん、良く腕をみがいておいて下さい。私たちのクラブは他のクラブと比べて見ても、盛んだとはどうしても言えませんが、ことしはどんなことをしても、卓球クラブを盛んにして強くなりたいたいと思います。そして私たち卓球クラブは、世界各国の有名な卓球の選手を自差して、この学校からも有名な選手を生み出して行きたいと思ひます。

——夏休み作品展示会受賞者——

	金 賞	銀 賞	銅 賞	賞		
習 字 の 部	田堰 光子	倉 寿子	小泉 光信	神崎 逸子	野呂 耕子	菊池 達行
	石川 京子	坂本ふみ子	杉村誠一郎	斎藤真佐子	小笠原美幸	酒井 幸子
	村岡千鶴子	乙川 絹子	牧野恵美子	宮田 繁夫	小山 京子	小川真理子
	岩田千恵子	森 孝男	外山 晴美	島田 道子	三上 正義	又坂 常人
	藤田 真司	斎藤 彰	上杉 秀一	三浦恵美子	森 富美	木村 照
	上杉 一子	芹田恵美子	近藤 通正	奥田志満子	大川 昇	遠藤 正明
	葛城ひろ子	中 昭成	辻 由紀子	島村 登	小島ひとみ	高崎 健次
図 画 の 部	佐藤 順子	寺内 慶人	住吉謙二郎	能登 真理	近藤 信一	山田 彰
	古西 悦子	熊谷 信子	芹田恵美子	谷地田 正	鍛原 三枝	富山 恵子
	武子 裕一	斎藤真佐子	中川 紀子	相田 義美	新井田恵子	水島 満枝
	後藤 喜久	小山 京子	辻 由紀子	稲場 博明	石沢 進	佐藤 順子
	久保 隆志	田辺千代美	青山 純子	佐藤 英子	野口 晴雄	
	青山 啓子	表 良一	木村 照	村岡ちづ子	稲垣 悟	
	小野久美子	近藤 通正	中村香津子	網代 徳雄	武野 道夫	
図 案 の 部	渡利 三郎	石川 京子	諸井 敏郎	麓 正則	稲垣 悟	青山 啓子
	熊谷 信子	坂本ふみ子	木村 照	若狭谷茂夫	石田 洋子	小野久美子
	村岡ちづ子	三浦 孝	中村香津子	籾下 明	武田多恵子	笠井 啓子
	鍛原 三枝	加藤 恵子	田賀 佳子	棚池 正治	水島 満枝	谷岡真知子
	中野 和子	小山 京子	高橋千恵子	野口 晴雄	後藤 喜久	笹木 ミチ
	小田 晴久	上杉 秀一		神山 敏子	青山 純子	
	東 達美	芹田恵美子		小島ひとみ	田中久美子	
手 装 理 の 部	水木くに子	富山 恵子		中川 紀子	久保 隆志	
	石川 京子	佐藤 英子	中村香津子	石田 洋子	小川真理子	
理 科 の 部	大村 信一	木村 隆治	白淵 茂	高橋 愛子	渡辺 保子	
	大竹 美子	小田 晴久	石川 律子	中村和香子	石川 京子	

——新校舎写生会受賞者——

野々宮京子	能登 真理	近藤 通正	今野 元司	岩田 千恵
村岡ちづ子	副島 隆	小泉 光信	斎藤真佐子	影浦由美子
岸田ひろ子	須藤 慶一		宮田 繁夫	佐藤 順子
塚田ふとさ	相田 義美		宮田 繁夫	小田 晴久
小島ひとみ	福田 耕二		田辺千代美	小田 賀佳子
芹田恵美子	奥田志満子		高橋 俊郎	小田 藤次郎
谷岡真知子	武子 裕一		佐藤 千枝子	外山 晴美

——冬休み作品展示会受賞者——

	金 賞	銀 賞	銅 賞	賞		
習 字 の 部	石川 京子	野々宮京子	小田 晴久	山本 泰子	鈴木真由子	水島 満枝
	森 孝男	田塚 光子	高橋 愛子	高橋 潔	岸田ヒロ子	杉村誠一郎
	藤本るみ子	坂本ふみ子		宮田 繁夫	島村 登	牧野恵美子
	石川 律子	斎藤真佐子		川井 博光	藤井 雅憲	外山 晴美
	上杉 一子	村岡ちづ子		石川 光世	及川由美子	中村 清江
	辻 由紀子	藤田 真司		奥田志満子	小島ひとみ	葛城ひろ子
	後藤 喜久	中 昭成		浜田 邦子	外崎 明	南川 達夫
		吉田 ふみ		佐藤 英子	板東 均	
				野呂 耕子	小川真理子	
図 画 の 部	寺内 慶人	野々宮京子	野口 晴雄	渡利 三郎	芹田恵美子	木村 隆治
	鍛原 三枝	石川 京子	石沢 進	近藤 潔	近藤 通正	後藤 喜久
	小島ひとみ	副島 隆	四ツ柳陽子	山本 泰子	岩田千恵子	笠井 啓子
	小泉 光信	馬場 和子	森 富美	須藤 慶一	中 昭成	渡辺久美子
	青山 純子	斎藤真佐子	内藤摩利子	猪俣 健一	池田千恵子	谷岡真知子
	東 達美	能登 真理	西田いつ子	佐藤 英子	中野 和子	
	久保 隆志	熊谷 信子	辻 由紀子	野呂 耕子	武野 道夫	
	青山 啓子	桶谷 孝司	稲垣 悟	小山 京子	白淵 茂	
		一戸 美幸	中村香津子	石川 律子	吉川夕起子	
		神山 敏子	青山 純子	武子 裕一	牧野恵美子	
図 案 の 部	須藤 慶一	副島 隆	丸山 栄子	野々宮京子	小川真理子	
	表 良一	奥田志満子	星 安代	馬場 和子	吉田千恵子	
	近藤 通正	村岡千鶴子	渡辺 静子	駒崎 三郎	中野 和子	
	辻 由紀子	高沢 孝義	水島 満枝	真狩 正志	大内 則子	
	田賀 佳子	藤井 雅憲	外山 晴美	森 富美	田中久美子	
	久保 隆志	外崎 明	木村 照	棚池 正治	青山 啓子	
	笠井 啓子	小島ひとみ	田賀 佳子	佐藤 孝	笹本 ミチ	
		富山 恵子		芹田恵美子	東 達美	
		倉 寿子		杉村誠一郎	東 達美	
型 工 作 部 模	寺内 慶人	石沢 進	大竹 美子	中野 和子	四ツ柳陽子	渡辺 静子
	渡利 三郎	斎藤真佐子		田塚 光子	及川由美子	中村香津子
手 芸 の 部	辻 由紀子	佐藤 英子		阿部 淑子	及川由美子	
	石川 京子	石川 律子		小山 京子	芹田恵美子	
		富山 恵子		藤本るみ子	水島 満枝	

私たちの研究

五球スーパ一の徹底的研究

一年E組 又坂 常人

一、周波数変換回路

スーパ一方式のラジオにしかない特殊な回路である。普通のラジオ、たとえば並三などはANTより入った電波を直接検波しているが、スーパ一式のラジオではANTより入った電波を一たん低い周波数（普通は四五五サイクル）に変えてしまうのである。このことを変換という。このANTより入った電波を変換するには到来電波より少し高い周波数の電波を共振させておき、到来電波と一緒に混ぜるのである。すると出てくる電波は共振させた電波と到来電波の差になつてでてくる。この共振電波と到来電波を混ぜることを混合といっている。こうして周波数変換した電波を「中間周波」といっており、中間周波は普通四五五キロサイクルである。なぜこのようになめんどうなことをするかというと、ストレート式よりはるかに分離がよくなるからである。なぜ分離がよくなるかという、電波は周波数が低いほど混信しない。スーパ一では四五五キロサイクルもの低い周波数に変えてあるので混信しないのである。この回路に一本または二本の球をつかっている。私の受信機では球を一本つかった回路にした。

二、中間周波増幅回路

周波数を変換し四五五キロサイクルにした中間周波を増幅

三、検波回路

する回路である。ここでは周波数が一定なので安定した増幅ができる。中間周波を一回増幅するのを中間周波（I・F）一段、二回増幅するのをIF二段といっている。また周波数変換回路との結合には中間周波トランスという特別の高周波トランスが用いられる。

スーパ一の検波には二極管検波を用いる。スーパ一は非常に分離がよいので音質が悪くなる。ここにプレート検波やグリッド検波のような音質の悪い検波方式を用いるとなおさら音質が悪くなる。それで検波には音質のよい二極管検波を用いるのである。然し二極管検波を用いるのはもう一つAVCがかげやすいという点もあるからである。AVCの説明は次に行く。

四、AVC（自動音量調整回路）

放送局には出力の大きい局と小さい局とがある。それでいま出力の小さい局を受けていたとする。そして次に出力の大きい局を受けると、いままでも出力の小さい局を受けていたので急に大きい音で鳴りだします。そこであわててボリュームを下げねばならぬとゆう結果になり、これを防ぐには強い電波の時は増幅を底く、弱い電波の時は増幅を高くすればよいわけで、この働きを自動的にするのがAVC回路である。AVC回路の説明をしますとまずIF増幅管にバリミュー管といつてバイパス電圧（グリッドに与える負の電圧）を増幅度が変る真空管を用い、そのグリッドを検波回路に直列に入れてある抵抗につないでおく。例えば弱い到来電波が入るとする、当然検波されて出る検波電流が多くなり、検波電流は抵

抗の中を流るので検波された電流が多いとオームの法則により抵抗の両端にかかっている電圧は低くなる。そしてあまり検波電流が多くなると抵抗の両端に生ずる電圧はついにOVを通りこしてマイナスの方にふえていく。すると抵抗にたないであるグリッドのバイパス電圧が高くなるので増幅度が低くなる。そしてその強い電波からずらすと検波電流が少なくなり、AVCがかからなくなるといわけでありこれをAVCという。

五、低周波増幅回路

二極管で検波された電圧は非常に低いのでこのまま出力管に入れてもスピーカーはよく鳴らない。それで検波と出力の間にもう一本ドライバを入れるのである。普通は検波用二極管とドライバを一箱の真空管に入れ複合管を使う。複合管を使う場合ドライバのカソードはゼロバイパスとなる。

六、出力回路

出力回路というのは普通低周波増幅回路では電圧しか増幅しないが出力回路では電流も増幅する。したがってラツパを鳴らすわけである。

七、電源回路

各真空管に電力を配給する最も大事なところである。これはスピーカでも普通の回路でも同じである。電灯線は交流なのでそのままではラジオに使えない。それで交流を直流になおさねばならない。この交流を直流になおす回路を整流回路とよんでいる。整流には普通二極管を用いる。(六充)

私たちの学校

一年A組 斎藤真佐子

一年A組 石川京子

自分の学校が、どのように作られているか、なんとなく気になるものです。そこに目をつけた私たちは、十二月十日現場監督室を訪ねいろいろと学校のことについて調べてみました。短かい期間で作ったもので、良いものとはいえませんが学校の建築について、できるだけ調べたつもりです。

一、学校の色

○外壁 クリームとピンクの混った色

○内壁 (上) 白に近いクリーム色 (下) こいねずみ色

○教室 クリーム色 ○戸、窓のさん うぐいす色

○天井 黄土色 ○屋根 赤色

二、材料について

イ、材料の出場所と種類

○セメント (小野田セメント、浅野セメント、約三四〇トン)

○砂、ジャリ (七重浜、上磯の清川、一、〇〇〇立方メートル)

○鉄筋 (一〇〇トン)

○アスタイル (田島応用化工KR、七四〇平方メートル)

○まるけいゆか (川口商工社、四五〇平方メートル)

○縁甲板 (六六〇平方メートル) ○モルタル (一四二平方メートル)

○モルタルぬり (九七六平方メートル)

○プラスチックぬり (一、九九七平方メートル)

○木毛板 (一八二×九一、一、〇三五枚)

○ダイヤセム(一、三〇〇平方メートル)

○カラートタン(月星印、九三五平方メートル)

○丸太(四・五メートル、一、八九〇本)

○木材(九六・五立方メートル)

ロ、材料の特徴と説明

○カラートタン：色が最初からついていて色がとれにくくつやがある。

○木毛セメント：木のくずとセメントを混ぜ合わせた物

○まるけい床：砂をあためてアスファルトと混ぜ合わせた物

○ダイヤセム：水をはじく働きがある

○アスタイル：マロン樹脂とアスベストが原料大きさ三〇・四八平方メートルの正方形でセメントタイルのりでつける。フローリングより冷たい。

三、工事について

(4)他の学校とのちがい

○くいを打っている

○運動場の屋根がかまぼこ形SK式シャーレン(予定)

○床がアスタイルで作っている。

○屋上を作らずに屋根をかける。

○カラートタンを作っている。

回学校の建築についての注意

○コンクリートは気候の変化でのびちぢみするのでわれ目を防ぐためにすきまをあける。(フリージョイント、伸縮接手)

ハ労働者の人数

○土工四四二 ○配管工七〇 ○才工二九七 ○紐ぶき工六〇
○大工一四三九 ○運転士六 ○建具工六六 ○人夫八一九

○塗装工二二九 ○鉄筋工三三〇 ○屋根工二二

○板金工四一 ○鍛冶工二三 ○左管工五四 ○硝子工四八

○アスタイル工二一 ○マルケイ床工二一 ○女人工七二四

○電工一六合計五二九四人(十一月三日現在)

〔2〕仕事の時間と休日について

○仕事の時間は朝七時から夜の九時まで(夜業の後)

〔3〕各部屋の説明と広さ

A 面積

○学校全体の敷地約四七八七坪

○普通教室六四・八平方メートル

○仮の職員室六四・平方メートル

○仮の保健室三二・四平方メートル

○仮の使丁室三二・四平方メートル

○教材室五〇平方メートル

○校舎一九一・八七平方メートル

B 各教室の説明

・普通教室 一五教室ある。壁の色は上が白に近いクリーム色下はコンクリート色天井は、木もうセメントという材料を使っている。一階の床はフローリング、二階、三階の床はアスタイルで作っている。

・仮の職員室 ここは、後に保健室として使われる所なので保健向きに作られている。たとえば壁の色は白、これは清潔な感じを与えるために、わざわざそうしたものだ。また大きな洗場もついている。

・仮の保健室 後に放送室として使われるので電気の設備が整っている。

・仮の使丁室 あとから職員室として使われるがまだ全部できていない。

四、学校が完全にでき上るまで

・約三、四年かかる、これは市の方で予算がたりないため私たちの学校の分としてお金が少しよりにないため一べんに建てられないそうです。ですからお金があると、私たちの卒業するまでには完全にでき上るそうです。なんとかして卒業まで作ってもらいたいですね。

結び 読んで見てどうでしたか、私たちの学校がどのようにしてつくられているか、よくわかったでしょう。足りない点があれば質問なさってください。また調べなおしたいと思います。

五稜郭の史跡

一年E組 辻 由紀子

五稜郭について

安政四年（一八五六）箱館奉行の企画により、蘭学者武田斐三郎成章が設計と監督に当たって八年もの歳月を費して作り上げた。元治元年竣工、本郭はその形が星形をなしているので、五稜郭と称され、幕臣、榎本釜次郎（武揚）は明治戊辰の役となった。大島府掉尾の事業としてオランダ式の洋式築城法によったもので、我が国唯一の貴重な文化財となっている。

五稜郭のできたわけ

徳川幕府の終わりのころ、蝦夷地（北海道）の北辺がロシアの勢力が増すにつれて国防の重要さが幕府の注意にのぼった。有名な

水戸の烈公が非常に心配して「箱館の関のさきもり心せよ波のみ寄する御代のあらねば」と述べている。安政二年（一八五二）幕府は五稜郭の役所、及び堀用として九万八千両と大砲二四ポンド五〇挺代四万両、合わせて十三万八千両（約六億六千七百七十六万円）という大金を支出した。伊予大州藩士武田斐三郎に命じて、西洋式の築城をさせたのが五稜郭城です。これは日本で初めての西洋式築城で、鉄砲や大砲による戦争を目的として作られたものです。

箱館戦争

慶応三年（一八六七）徳川慶喜が大政を奉還したが、幕府の家来榎本釜次郎（武揚）大島圭介などはこれを不服として同志が相談し、蝦夷地を徳川家の領地としてたまわるよう朝廷に願ひ出した。その願ひがゆるされないことがわかったので、蝦夷地を開拓して北門をけいびするという名目で、明治元年（一八六八）三千余人を軍艦六せきに分けて品川をぬけ出した。十月二十日渡島の鷲の木に上陸し、直ちに箱館にむかって進軍した。箱館府知事清水谷公考は官兵をもつて、途中大野付近でむかえ撃ちをしたが、兵力のへだたりから敗れて五稜郭にしりぞき、二十五日には青森まで退却した。榎本軍は箱館付近ばかりでなく、江差・福山（松前）・室蘭なども占領し、蝦夷地は徳川家の領地であると宣言したのが明治元年十一月です。明治二年二月脱足軍征服する大命が降り清水谷箱館府知事は、全軍総督に任せられた。四月官軍は青森に集結を終わり、四月八日艦せん十せきに分乗して七千余人の兵力をもつて出港し、九月に渡島の乙部に上陸し、その日先鋒隊は江差を占領し十一日には主力は松前より一隊は木古内、一隊は市の渡山道より函館に向かって進撃した。その間激しい戦いが行な

われ脱走軍は三せきの軍艦を失なった。官軍は増援隊が次々と加わり約一万人以上となり五月二日をもって総攻撃開始、榎本軍はこの時兵力は二千余人にへってしまつた。官軍はすでに定まり、官軍は十二日榎本軍に降参を進めたが、初めはこれをことわつた。十五日には弁天砲台、十六日には千代ヶ岳が官軍にとられ、五稜郭だけのこつた。榎本は切腹しようとしたが、黒田清隆にとめられ刑につき部下を許されるよう願いで、十八日五稜郭を出て、官軍に降参した。

武田斐三郎成章について

文政十年九月伊予国喜郡大州に生まれ、大阪に出て緒方洪庵の門に学んだ。安政元年蝦夷地につかわされ、箱館奉行所支配諸術調所教授役となつて門生を教えるかたわら、五稜郭、弁天台場の構築に従事した。採鉱冶金航海など数々の業績を残し、元治元年四月江戸へ去つた。維新後兵部省に出任、陸軍士官学校の提理に任ぜられ明治十三年（五十四才の時）病氣になり東京で亡くなつた。

榎本武揚について

一八三六年江戸に生まれた。明治の政治家で、通称釜次郎、号は梁川。一八六一年幕府の命により、オランダに留学、一八六六年帰国して海軍副総裁になつた。一八六八年十月開陽以下八艦と兵二千をひきいて、箱館五稜郭により明治政府に抵抗した。黒田清隆の軍に敗れて、三年の刑に処せられた。出獄後、黒田の下で北海道拓殖に努力し、一八七四年特命全權大使としてロシアに行き、千島樺太交換条約を締結した。また、清国（中華人民共和国）特命大使として、伊藤大使をたすけて、天津条約の締結に努力した。のち、文部・外務大臣を努め、一九〇八年に亡くなつた。

詩

ぞうきん

一年F組 牧野恵美子

私はぞうきん

毎日毎日生徒たちの手で

私の一日は始まる

壁にぶつつけられたり

床に投げつけられたり

私の体はぼろぼろになつてゆく

そうじの熱心な人

そんな人に使われるとき

私の体は気持ちよく床をすべる

私の友人はほうきさん

夜だれもない教室のすみっこで
私とほうきさんは語り合う

「きょうはどうだった。」と
そして話がつきたとき

私は深いねむりにおちてゆく

空

一年F組 西村静子

白一色の地

青くすみきった空

そして黄金の太陽の光が

人間の創造したものに

自然が生んだものにふりそそぐ

いきいきとした山に

ごみごみした家の屋根に

いつしか黄金の光はかくれ

灰色の雲が果てしなく広がる

そして白い雪がふってくる

人間の創造したものに

自然が生んだものに

冬の朝

一年E組 武田多恵子

うらん寒い

空から雪が銀一面の広場に

雪が雪の子供が

舞いおりて来る

私は見つめる

おどれおどれと空で親が言っている

風が吹く

吹雪になる 風と雪のけんか

私のひふは冷たく凍る

顔は顔は青白い風のようにめくれる

風と雪がひっしに戦う

すさまじい雪のしぶき

風が勝った雪がすなおについて行く

風がいばる

寒い私はおこる

火の神もおこった

火の顔 私の顔同じだ

おばあさん

一年組 阿部 涼子

おふろへ行つて

湯ぶねにせずんでいたら

私の前に

よほよほのおばあさんがはいつて来た

そして私の顔を見て

歯のない口と細い目で

ニコニコ笑つた

初めて会つたおばあさんが

私もつられて笑つてしまつた

こしの曲がった

骨と皮ばかりの

白髪のおばあさん

笑い顔がさびしそつたが

うちでは何をしているのだらう

母の日記

一年組 中村 香津子

押入を整理していたら

日記が出てきた

母の日記 古い日記

ほこりだらけの日記

しみのついた頁をめくると

なつかしい母のにおい

一つ一つの文字に

母の希望、そして愛のこもつた日記

「香津子がオプオプと言つた」

こんなことを書いた母

うれしくて書かずにはいられない

そんな気持。私にはわかります

私に母だつたら

おなじことを書いたでしょう

母の日記に

思 い 出

一年E組 津 里 洋 子

そう……オカッパ頭の小さい時

よくおまえはあの白い青い波がくる所で

サクラ貝を拾ったものだ

片手を私につながら片手をエプロンの

小さなポケットにさし込んで

一緒によく浜辺を歩いたね

八月の昼の心よい風がおまえに

話かけるかのように寄ってくる

新鮮な暖かい太陽が

おまえの小さなほおを照らす

おまえはまた顔をほころばせて

貝を拾うこちらに背を向けて

真剣に貝の砂を落していた姿の

かわいかったことふりかえり

ニコツとあどけなく手招きして

また喜々としてかけて行く

おまえのその砂の上の小さな足あととを

私はいつまでもそのままに

のこしておきたいような気がしたものだ

水

一年D組 森 富 美

朝おきて顔をあらう時

せんめんきに水をくむ

手ぬぐいをいれると

せんめんきの水が

つぎつぎと手ぬぐいをぬらしていく

その時の水は生きているようだ

だまって見ているとこわい

水で顔をあらうととてもつめた

ゆ め

ゆうへのゆめ

どうしてもわすれられない

おもしろくておかしくって

おなかのかわがよじれるくらい

とつてもおもしろいの

おしえてあげたいけど

ひみつなの

私の頭の中のひみつはこの中に

はいっているの

そのゆめ私とゆめのひみつなの

短歌

一 F 小田晴久

にっぽんの姿美しく山々に

心さそわれ今はなき人

休み整え友とあうのを楽しみに

カバンあければしけんがみあり

一 F 牧野恵美子

床の間に母がかざった水仙の

においの甘き冬の夜しずか

一 D 佐藤孝

心こめてすみ黒ぐろと父が書きし

希望という字我にほほえむ

停電の夜に書く日記はかどらず

ろうそくの灯のかすかにゆれいる

ほの暗いあかりの下で夜なべする

母のひざには小猫のねむる

一 G 阿部涼子

走り去る電車の窓に友見つけ

手をふり笑う朝の風景

俳句

一年E組 中村ニミ子

朝やけに向って走るや新聞屋

一 F 牧野恵美子

夕刊を片手に見つつもちを焼く

息白し手をふところに友を待つ

なべ洗う手もとをくぐるかわずかな

けんかせし友小走りに時雨ゆく

一 E 辻 由紀子

こがらしやのきばにふるえるすゞめかな

一 F 西村静子

一年D組 岩田千恵子

午後の日の緑もぬれる春の雨

みそしるやブツとにおう雪の夜

ピンポンのはずむ音あり春の窓

さつき晴れちぎれんばかりこいのほり

えん側にひうひうおどる落葉かな

一年D組 松宮章子

こおろぎやはしらのかけにひげふりて

水入れにいなごとびこみ写生会

一年D組 佐藤 孝

ふぶく夜の道行く人の影早し
うみたてのまだ暖かき寒卵

一年G組 黒川 力

のきさきのつららに光る陽のひかり
こべやにてひとりたしなむはい句かな

一年C組 藪 下 明

冬空にほつんと一つたこの舞い
のき下にするどく下がるつららかな
冬空にサイレンの音しみわたる
はく息の白く登るや寒の朝

一年G組 市川 佳成

とうふ屋の声かすれけり霜の朝

一 E 吉田 ふみ子

ふくじゅ草新芽を出して春を待つ
雪の夜思い出かたる父と母

一年B組 菊地 由里子

朝つゆをふんで仕事へ母急ぐ
悔の実をひろう妹つゆにぬれ

一年C組 小山 京子

雨晴れてくもの渠玉と輝けり
さびしくも霜にうたれた庭の花

一年D組 外 崎 明

冬山にあかりがともるヒユツテかな

すい筆 作文集

松川事件の判決を聞いて

一年A組 石川京子

八月八日の午前九時、松川事件の判決があった。私の家ではちょうど朝御飯を食べていた。でも九時の時報が鳴ると一せいにテレビに目を向けた。判決の瞬間、しんと静まりかえった。「被告たちいずれも無罪。」この言葉は今でも忘れられない。私は、思わず手をたたいた。松川事件の事を知ってから、私は無罪を願っていたからだ。私はこの時日本中のだれもが無罪を願っていたのちがいないと思った。

松川事件は十二年前に起った事件だ。十二年前という私が生れてまもない時だから、事件の様子は私に全たくわからない。父は私に色々教えてくれた。母はそんな事を教えてはいけなと言った。けれども私は松川事件の事をよく知りたいと思っていた。私は父の話で松川事件が十二年間もかかった事や赤間予言などのわからない事がはつきりとわかった。私は判決発表後の被告の家族が喜んでる姿を思い出して、無罪になってよかったと改めて思った。その時はまだ無罪の判決を喜ばない人がいる事気がつかなかつた。しかし検察側が無罪の判決に反対しているのはわかっていった。昼のテレビニュースを見た。やっぱり松川事件の事が主だった。その時は被告代表やその家族の喜びの声が入った。

被告代表として一番年長の杉浦三郎被告が無罪の判決を喜びお礼の言葉を述べた。はずんだ生き生きとした声だった。そのニュースが終わり、汽車がてんぶくした時に機関士をしていた人の家族が出た。その人たちはこう言っていた。「まったく全員がね、無罪だとはね、なんてご先祖様におわびしたらね。」と泣きながら言っていた。私はこの人たちが身内をなくしたつらさを考えると本当にその犯人が憎くらしくてたまらない気持は良くわかる。しかしなんの罪もない者が十二年間罪をさせられ、どこを歩くのにも胸を張って歩けなかった苦しさは、その身になってみないとわからないくらいだと思う。そしてその疑いははれて心の中が日木暗れになった人たちをまだ恨んでいる。この人たちはもう松川事件には第三者なのだと思ふ。この人たちが無罪の判決を言いわたされたかぎり、もう犯人でないことははっきりしたはずだ。だからこの人たちを恨んではいけない。真犯人をさがさなければならぬ。それに協力することが無罪の判決を受けた人にも、身内の人になくなった家族の人たちにも一番の幸福なのだ、と言いたかった。松川事件は解決した。しかしまだ真犯人が見つからない。この地球のどこかにいるにちがいない。地球にいる犯人を早く見つけてほしいと私は思う。父の話してはその頃は電車などがしょっちゅうそんなことがあったそうだ。十二年間罪をさせられた人は、弁護士言葉でないが、本当にこの事件のため青春をうばわれてしまった人たちを心から気の毒に思う。私は松川事件の被告だった人たちがこれから幸福になれるように願う。

通知票

一年A組 三浦公子

冬休み、夏休み、春休みは、ほんとうにうれしく、また楽しいものだ。だがその一日前に先生からいただく、三十センチ四方の紙きれはまったくいやだ。それは言うまでもなく通知票であるからだ。それを先生の手から受け取ったとき、私は何よりも最初に下ったか、上ったかを見る。そんなとき、下ったのが最初の方であれば、デメキン目をきんきんの目にとりかえて、上ったのをらんきにさがす。だがそれがもし反対であっても、私にはまたそれなりに心配が待っているのである。おまけに下ったのばかりだと、家へ持って帰るのがどうにもこうにもせつない。

この七年間をふりかえってみて、そんなときの私は父にこんなことを言ったときもあった。「ねー。お父さん、先生がこれももう少しがんばればすぐ上がるんだって。」とか、ときには、「先生、これまちがってつけたんではないかい、私こんなはずないと思うけどね。」とか言っていて、ごまかしたこともすくなくあります。だが父はいつも口ぐせのように、「公子、だれでもみんな努力すればできるようになるんだよ。人が一回続むところを、一回半なり二回続めばいいんだよ。」と、いつもいいます。だが私は、「ぜんぜん勉強しなくてもできる人いるよ。」と言うと、父は、「そんな人はいないよ。しないといけないといっても、みんなかげで力いっぱい勉強しているんだよ。」と言う。だが私は、またそれに対して「いるよ!。」と言う。父はあきれたような顔をして、「そんな人はいないよ。いても何百人に一人だよ!。」と言いま

す。私は勝てる見込みがなかったので、父の言うことにしたがうことにしました。ところがやってみるとたやすいようではあるが私にはできない。自分ながら不思議でしよがない。

ところで私は、通知票なんかあてにならないと思います。これは大部分テストでつけるのではないのでしょうか。テスト用紙には自分の実力の何パーセントかを表わすことができるのでしようが、人間何億もいれば、人それぞれに持っている能力はちがうと思います。いったい通知票を何の理由でつけるのか、私には見当がつきません。そんなことをするよりも私は、小学校から中学校と同じように、高校も大学も一人一人が自由に進めるようにのぞみます。

おばあちゃん

一年A組 倉 寿 子

家のおばあちゃんは、もうかなりの年だが、すごく元気である。家の事を私たちがやると、なにもかも一回くり返してやるのだから、きちょうめんな性格なのだろう。大きな病氣は、一回もしたことはないが、かぜをひいたことが二、三回ある。寝ていてもおちつかないのか、少し良くなるとすぐ起きて、あくせくと仕事をしはじめる。おばあちゃんの楽しみは、畑を少し作っているので夏になると毎日畑に出かけて行くことだ。そのほかテレビを見るのも好きだが、おばあちゃんの好きな番組は、いつも私たちのために見られなくなる。おばあちゃんは、なによりも畑のこととなると、とても熱心だ。そこいらの犬が畑の中に入っていると、「こら!。」と、どなる。あまり大きい声ではない。おばあ

やんのいうには、「いつしよけんめい種をまいて作ったものを、犬にあらされた時の気持はわかるまい。」そう言われればそうだ、と思うが、あとはなんにも感じない。でもおばあちゃんが、畑を作っているおかげで、たいいていの野菜は買わなくてすむのだ。おばあちゃんは、またぬい物や編物がじょうずで、私は何枚かの着物を作ってもらった。私は手がぶきよなので、編物やぬい物は出来ない。私がおばあちゃんに教えてくれ、というと、おばあちゃんは、「おばあちゃんが、死なないうちに寿子にも教えておかなければならないな。」と言った。ほんとうに、おばあちゃんが死んだらどうしよう。私の母も去年亡くなったばかりだ。だから私は、おばあちゃんに、そう言われるとなおさら悲しくなるのだ。家事のことにしても、私たちがやらなければならぬ朝起きも、全部おばあちゃんがやるのだ。家事のことから全部家の事をしてくれるおばあちゃん。私にとっては、大事な大事なおばあちゃんだ。

お友達への引越

一年C組 野呂耕子

私のクラスのお友だちに新井田恵子さんという人がいて、とてもつき合いやすく、とてもいい人でしたのに、一月十六日、登別へ引越して行きました。新井田さんと私は、特別仲が良いわけでもなかったのですけど、なんとなくさびしい気持ちでした。

十六日、私と笹森さんは、九時ごろ家を出ました。汽車の発車時間は、十一時十分なので少し早かったが、買い物があるので、早めに出たのです。買い物ですんでから駅へ行き、新井田さんと

会いました。新井田さんは、顔ではなんでもないようにしていたが、心の中では、さびしい気持ちではなかったかと思いました。きょうの新井田さんは、いつもよりきれいに見えたが、その半面さびしいような見え方も見えました。それから数分後塚田さんが来て、後を追うように、新井田さんの小学校の時のお友だちが来ました。小山さんは札幌に行つて新井田さんと会えなかったのが、残念だと思いました。古西さん、岸田さんも来ていました。それから私たちは入場券を買つてホームに入りました。そこに行つたのは、私に笹森さん、塚田さん、岸田さん、古西さん、下山さん、佐藤せつ子さん、それから奥田さん、佐藤英子さんと、新井田さんのお友だち四人でした。それからすぐ、永谷先生が来て、新井田さんの写真をとっていました。先生が来た後に、小笠原さんと、鍛原さんが来ました。新井田さんは、登別の学校に行つたら、「きつと学年で一番の成績をとつて、手紙をよこす。」と言つて、みんなに、「かんばりなさい。」と言われていました。

ベルが鳴る二分くらい前に、新井田さんは、汽車の中の人となりました。その時、いつものように、舌を出していました。私はそれは、はずかしさをかくすためだろうと思つたので、なにも言わずにだまっています。ベルが鳴ると汽車はすべるように発車し、一分もたたぬうちに、もう見えなくなっていました。私はとてもさびしい気持ちをおさえきれないような気持ちでした。でも、春休みに遊びに来ると言うので、少しおちつき、それからすぐに、まっすぐどこへも、よらないで家へ帰りました。帰りは、一人だったので、自分だけが、どこかへ、行くようなさびしい気持ちにおそわれていました。

穴澗へ行つて

一年F組 小田 晴久

空は青空、白いまんじゅうみたいな雲がさびしそりにボツンと一つ浮んでいる。「海へ行くのに、ぜっこうの日だ。」ぼくは思わず口に出した。「兄につれていってもらおう。」と思うと急に早く行きたくなった。母におにぎりを作ってもらい、トマトを二、三コを持って家を出た。ぼくは何回も行くとあまり持っていないことにしている。バック一つを持ち道歩いていと兄の友だちに合った。その人も「いっしょに行く。」といったので、いっしょに電車に乗り穴澗へ急いだ。電車の中は子供ばかりで、しかもたいいの人は海へ行くようだ。ぼくは「こういう日はだれものがないんだなあ。」とつくづく思った。だまっけていても、汗がこめかみのあたりからお流れ落ちてくる。でも海へ行くのだと思うといくらかすずしくなるように感じる。

弁天についた。列をつくつて穴澗へむかっている。ぼくたちもその列の中に加わり、とけかかっているアスファルトをふみながら歩いた。坂の上にくると青い海が見え、浜風が吹き、白い雲が浮び、ずつと遠くの上磯のセメント工場の煙が青空に線をかき、なんともいられない景色である。坂を下りると石切り場が見えてくる。遠くの方では別に何でもないように見えた。だがその下へ行くとも目がまわるような断崖絶壁である。穴澗についた。監視所のある浅瀬のところでは色とりどりの水着をつけた人々が泳いでいる。ぼくたちは、つり橋をわたり一本橋をわたっていった。そこにも大勢の人が泳いでいる。そこで泳ぐことにした。ぼくは

おもに貝をとろうと思っていた。兄とその友だちは二人で沖の方へ行つた。ぼくもその後についていった。水めがねをかけてちよつと海中に顔を入れて見ると、底の方がほけて見え海藻がゆれていった。もぐって見るとつぶが多くこれといった貝は見あたらなかった。上つて昼食をとりあたりを見まわしても、知っている人はだれ一人としていない。でも兄たちがいるのでたいくつはしなかつた。太陽の方に背中をむけるとじりじりとしてくる。遊んでいゝうちにだんだん帰る人も多くなつてきた。時計を見ると四時十分、ぼくたちも帰る仕たくにとりかかった。したくといつても服にきかえるだけなので四時半ころにそこを立つた。帰りもきゆうくつな電車であつたが、今日一日がとでも楽しかつた。兄はつかれてねてしまつたが、ぼくは別につかれなないので帰つてきても遊んでいた。姉たちは「タフだねえ」といつていた。

姉さん

一年B組 乙川 絹子

十二月三十日は、私にとって忘れることができない日である。というのは東京に行つていた紀子姉さんが正巳兄さん（姉の旦那さん）と一緒に遊びに来たのだ。私と母とで飛行場まで迎えに行つた。東京発九時四十分、函館着二時五分というのに、私と母はあまり急ぎすぎて飛行場についたときはまだ一時ちよつと過ぎたばかりであつた。

二時十五分前弁天にいる姉と兄、それに百合子と三人で、私たちのいる飛行場に迎えに来た。時間は刻々とせまつてきた。私は、姉と正巳兄さんに会えるという喜びでいっぱいだった。二時五分、

ついに飛行機は姿を現わした。私はもう胸がドキドキしてきた。そして私たちが見守る中で姉と兄とが飛行機から降りて来た。私は思わず、「お姉ちゃん。」とさげんでしまった。姉はびっくりして私の顔を見た。私はここで初めて正巳兄さんと顔を合わせた。写真とは違った顔に見えた。さっそく私たちは我が家へと車を走らせた。家の中に入って、私は初めて口をきいたのである。

姉はボストンバックの中から、みんなにそれぞれおみやげを渡した。私は姉が作ったトランジスタラジオを一台もらった。姉の勤めている所は、トランジスタラジオの組み立て工場、正巳兄さんは、その技師なのだそう。その晩は東京の話をいろいろ聞かせてもらった。まだまだ話したいことは山ほどあったのだが、私たちはもうそろそろ寝ることにした。

翌日は大みそかである。例年の通り私たちはにぎやかに年越しをした。そして十二時少し前、私と姉と正巳兄さんと三人で八幡さまに行った。すごい人出だった。お参りをすませて家へ帰ってきたら今度は母、父、弁天の姉、兄と四人でお参りに行った。今度は私と姉と兄と百合子とで留守番をすることになったのだ。私は寝ないでみんなの帰りを待った。やがてみんな帰ってきたので寝ることにした。今日でもう今年ともお別れだ（一九六一年よさようなら）一月一日いよいよ一九六一年ともお別れ、顔を洗ってからみんなに、「おめでとろ。」といい、そうに食べた。私は餅を一枚より食べなかった。いつもなら親類の家へ年始回りに行くのだが、今年、どこにも行かなかった。二日の日に、姉と兄とは結婚式の記念写真をとった。（姉は角かくし、兄はモーニングを着て）とてもきれいだ。三日の日は、姉と兄との披露宴、親せきの人たちや父の会社の人たちを招いて、とてもにぎやかに

行なわれた。私とすぐ上の姉と二人でこまどり姉妹の唄を歌った。六日、楽しかった一週間も過ぎて姉たちは、東京に帰るのである。「また来年も来るわね。」という姉の言葉に続いて、「絹子ちゃんしつかり勉強しなさいよ。」と言う兄の言葉に私は泣いてしまった。

いよいよ出航の時間、私たちは、ちぎれるほど手を振って別れを惜しんだ。その日は弁天の姉の家へ泊ることにした。夜中に急にさみしくなったが私は、「また来年も来るわね。」といった姉の言葉を思い出して元気が出た。

試 験

一年D組 小島ひとみ

私は学校で一番きらいなもの、いやなものは、と聞かれたら即座に試験と答えるだろう。それほど試験はきらいだ。私だけではない。みんなきらいだろう。でもそんなにきらいでない試験が一つある。それは国語だ。べつにできるわけではないがなんとなく好きなのだ。試験の時はやはり勉強はしたくないなと思ってもしなわけにいかない。一番わからないのは体育だ。そして一番勉強するのは定期試験の時だ。今までの試験のうちで一番悪かったのは（学力テストをぬいて）中間試験の時です。なんとかしてもう少し上がりたいと思った。そのときには前よりもだいたいよくなった。でも少しおそくまでやっているとお母はもう寝なさいと言う。それは私はあまりおそくまで起きているとつぎの日疲れるし頭が痛くなったりするからだ。だからおそくても九時ころまでしかやらない。

編集後記

それから試験紙を配る時はみんなしーんとなる。私もどんな問題かなと思つて心配になる。ずつと見ていってわからないところへ来るとすごくあせる。定期試験の時の職業はあんがい簡単だった。国語は思ったより悪かった。そして結果は上がった。その時はうれしかった。父もよかつたねと言つていた。私は試験の結果が人よりよかつた悪かつたとあまり競争したくない。そういうことから仲のよかつた人とも仲が悪くなつたり、あまり交際しないようになつたりするからだ。現にそういうこともあつたからなおさらだ。夏休みが終わるとまた試験がある。でもこんどは下がるかもしれない。できるだけがんばらう。



「五稜」は生徒会の雑誌である。だからできるだけ生徒諸君の自主的な計画によつて、生徒のためになる雑誌を作つていきたいと思つたが、一年生には荷が重すぎたようでこの試みは中絶し、先生方によつて仕事が集められてしまったことを残念に思う。

表紙は新校舎の特色であるアスタイルを圖案化してみた。来年には表紙もカットも全部生徒のもので満たしていきたい。

内容は五部にわかれ、第二部のこの一年の思い出に最も主力をおいた。予算もとほしくまずい編集ではあるが、思いきつて写真を豊富にしたこの雑誌は、第一回生の諸君らに本校発足当時の苦しく不自由で、それなりにまた希望と生きがいにあふれた日々の記憶をいつまでも懐しく、鮮明に浮き出させることであらうと思つている。

第三部は生徒会関係の集録で、企画に新鮮さはないが、頁数は最も多く、この雑誌が生徒会のものであることが強調されたと思つている。

第四部の私たちの研究は、夏休み、冬休みをとおし、諸君らの中に科学や社会の方面に特別熱心な研究をしている人たちのいることを知つて、この雑誌をとおしますます諸君らの研究心が増大し、結果も立派に向上して、いずれはこの部門が「五稜」の特色となればと思つて特設した。

第五部の作文や詩・短歌・俳句の中にもこれが中学一年生の作品かと驚かされるような立派なものが多く、感動しながら編集に當つた。ますますこうした才能を伸ばし、心豊かな人間となつてもらいたいと思つた。

(菅原記)

